北村の民話

「北村民話」は、従来民話集として発刊されていませんでしたが、「新　いわみざわ民話」を作成するにあたり、村史や部落等からの収集や古老の方からの聞き取りなどにより、全３２話を掲載いたしました。

北村の始まりのころ

～ ある開拓者の回想 ～

私の父の家は、越後（今の新潟県）で農業をしていましたが、そのころまだ拓けていない北海道のことを聞いて、「広い土地を持って立派な農家になってやろう」と決心し、明治二十七年頃、一家そろって新潟からたくさんの入植者の集団といっしょに船に乗り、小樽に上陸し江別まで汽車で来て、石狩川の川汽船で北村の船着き場に下りたのです。

昔の北村は、土地の肥えている石狩川の近くは大きなアカダモの木がたくさん生えていたし、泥炭の土地は大人の背丈よりも高いヨシやカヤがたくさん生えていました。最初は拝み小屋といって、木を組み合わせてヨシをかぶせて作った三角テントのような粗末な小屋に住んでいました。冬になると吹雪の夜などは、すきまから入る雪がふとんの上までかかったものです。夜になるとランプの代わりに小灯しを灯しましたが、今の電灯とは比べものにならないほど不便なものでした。

木を切り根を掘り返さないと畑にならないので、毎日朝から晩まで木を切り倒したりヨシを刈ったり木を焼いたりするのが仕事でした。切り株の上に大人が四、五人楽に座れるほどの大木がたくさんありました。切り倒した木は集めて焼いたり、いかだに組んで石狩川に流して石狩まで運んで売ったり、とにかく木を片付ける仕事に一生懸命でした。

あの頃の木はちょっとマサカリを当てると、二メートルもスパッと割れたものでした。畑には、ヒエやトウモロコシ、ナタネ、エンバク、バレイショ、キャベツ、イナキビ、ソバなどを植えていました。

入植して数年の間は、開墾した畑がわずかなので、作物は取れても自分の家族が食べる程度でした。その後、畑が少しずつ広くなるにつれて、作物を船つき場まで出して売るようになったが、早く暮らしが楽になるようにと、夢中で三本鍬をふるったものでした。

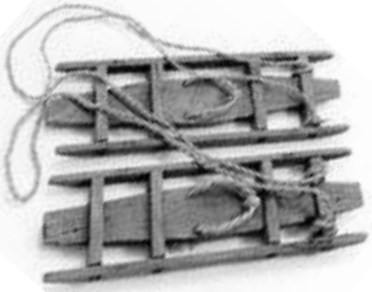
米を作るまではヒエやトウモロコシ、バレイショ、イナキビなどを団子やお

かゆにして食べていました。米は一年のうち、お盆や正月、お祭りの時しか食べられなかったし、しょうゆや塩も節約して使っていました。

魚や日用品は、川汽船に乗ってやってくる行商人から買ったり、年に何度か岩見沢へ出た時に買って来たりしていました。

やがて、米作りが始まりましたが、泥炭の土地での田植えは、ずぶずぶぬかるので大きな下駄(田下駄)をはいて植えていました。

開拓が進むにつれて道路も作られましたが、岩見沢へ行くのにも、今では車で二,三十分ですが、踏み分け道なので二日がかりでした。夏ともなれば三メートルほどの草におおわれて、雨の日はもちろん露のため頭からびしょぬれになったものです。また、夜急用の場合は、熊が出ることもあるので数人でお互いに呼び合いながら歩いたものでした。岩見沢へ行く場合などは、子どもを背負う者、荷物を持つ者など数人で一行となって歩きました。途中ぬれたりよごれたりするので、着替えをしなければならなかったのです。



田下駄

ある日、塩マスを買いに峰延へ出かけようとしましたが、大願や中小屋の方は、三メートル以上もあるヨシが生えていて、樺戸道路(月形～峰延)まで出るには、ヨシ原をかき分けて歩くため、方角が分からなくなります。それで、家の人が高い木に上って手ぬぐいを振って右左の方角を合図して、やっと樺戸道路まで出て、まる一日がかりで塩マスを買って帰ったことがありました。

北村雄治の弟の北村謹が牧場を開きましたが、ある時アメリカから種牛を買いました。今のお金にして一頭五千万円もする牛です。

小樽まで船で運び鉄道で岩見沢まで来ました。岩見沢から牧場までの道は、ずぶずぶぬかる泥炭道です。もしも牛の足を折っては大変です。それで、岩見沢から牧場までムシロや板をしいて、その上を歩かせて、ようやく畜舎まで運び入れました。開拓が進むにつれて道路も整備され、大正初期には岩見沢まで馬車が通れるようになりました。

ある時、馬車に大根を百五十本ほど積んで行ったが、道が悪くて車輪の軸までうずまってしまい、やっとの思いで岩見沢に着いた時には三十本しかなかったこともありました。その後、昭和七年に大水害を受け、その救済事業として道路の土盛りや砂利敷きが行われ、現在のような立派な道路ができる基礎になりました。

飲料水に悩む

石狩川沿いに開けた北村は、本格的な客土による土地改良が始まる前は泥炭地であり、入植した人々は井戸を掘っても泥炭地特有の

赤茶けた水に悩まされたと伝えられています。井戸から汲み上げた水を木炭や砂利を敷いた装置で濾して飲料水にした例も残っていますが、大体はそのまま利用する例が多く、「真新しい手拭いもすぐに赤く染まってしまったものだ」とも話す古老は多くいます。

ある古老は、親戚を頼って北村に来た折、用を足したくなったがいきなり「トイレを貸してください」とも言えず、家の周囲を見回したら赤い水をたたえて埋められた木桶が目に入り、小便だめと思いこんで用を足したところ、「夕方になって家の人がそれを汲んで夜食の用意を始めたのには腰が抜けるほど驚いた」と話していました。

「用を足したとは言えるはずもなく、気まずい思いをしたことは今でも忘れない」と話していますが、泥炭水を生活用水としていた折の苦労を物語るエピソードです。

泥炭水に悩まされた生活の中から、「良質の水が飲みたい」との願いが、やがて簡易水道設置、桂沢水道企業団加入への原動力となったことは言うまでもないことでしょう。

赤んぼ排水と お化け排水

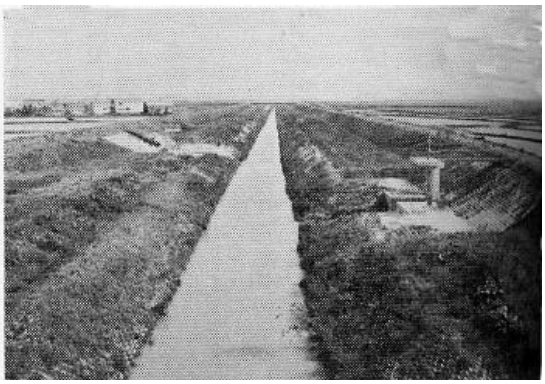
明治二十年（一八八七年）、月形と峰延の間を結ぶ道路工事が樺戸監獄収容の囚人たちの手により始まりましたが、道路予定地は泥炭地や湿地帯がほとんどであり、苦労の連続であったと伝えられています。

道路予定地の両側に排水溝を掘って、水を抜く仕事をした後、土砂を入れたり、丸太を交互に敷き重ねるなど、手間がかかる仕事になったそうです。砂利は石狩川から自然にあった排水を利用して舟で運んだといわれていますが、囚人たちは、夏は赤ふんどし一枚、冬は赤地の作業衣を着ていたことから、地域の人々は囚人たちのことを『赤んぼ』と呼び、自然排水を『赤んぼ排水』と呼んだそうです。

この排水も昭和五十年（一九七五年）頃の土地基盤整備事業により姿を消しましたが、赤んぼ排水の名称は今でも残っています。

現在の三日月排水の一部分をさして『お化け排水』と呼んでいますが、豊正地区の開拓の初め頃は湿地が多くあり、少しの雨が降っても

水面が動いて川のようになり、昨日までの川が湿地の下をくぐり抜けて見えなかったところに川が出現することも数多くあったことから、地域の人たちはいつからか、お化け排水と呼ぶようになったそうです。また、囚人たちが苦労して掘った排水溝が、冬を越すと元の自然排水状態に戻ってしまうこともお化け排水の由来になったそうですが、赤んぼ排水、お化け排水の名称は、先人たちの苦労を物語るもので、末長く語り継がれていくことでしょう。



青い目の人形物語

青い目の人形は、昭和二年（一九二七年）、米国の世界児童親善会から日本各地の小学校に、「この人形もひな祭りに参加させて下さい」という言葉とともに、日米友好のしるしとして贈られたものです。

北村でも北村尋常高等小学校にリラと名づけられた人形が、また、豊正尋常小学校にはヘンリーと名づけられた人形が贈られました。同年五月二十一日に両校合同で北村尋常高等小学校を会場にして歓迎会が開かれ、待ちに待った児童たちが大喜びしたと、その時児童であった人が後年話をしていたことが残っています。その後、青い目の人形のお返しに日本人形を米国に贈ろうとの動きも出て、北村の児童の皆さんも寄付したそうです。日米交流と米国理解に役立った青い目の人形ですが、日本の人形とともにひな祭りに参加し、幸せな時を過ごしていましたが、不幸なことに昭和十六年（一九四一年）十二月八日、日本と米国が戦う太平洋戦争が始まると『敵国人形』と呼ばれ、国の命令で処分される運命となりました。北村のリラとヘンリーの青い目の人形がどのように処分されたかは不明ですが、昭和五十四年（一九七九年）に旧北村中央小学校で人形の写真と青い目の人形についての関係資料が発見され、昭和二年当時の様子が判明しました。小学校でひな祭りを体験した人たちは「なつかしい」と感想を述べていますが、青い目の人形や歓迎会の写真は、北村農業資料館に展示されており、訪れた人たちは昔を偲んでいます。

水天宮物語

石狩川沿いに開けた北村は、海抜が低いこともあって数多くの水害に悩まされて来ましたが、時には尊い人命が失われることもありました。北村の幌達布地区では、毎年七月五日に川祭りの行事を行っていますが、水難犠牲者の霊を慰めるもので、遠く明治四十五年(一九一二年)七月五日、地元の長谷川武司、武市村三次の両名が石狩川に流され、地元の人々が捜したところ遺体で見つかり、一同悲しみにくれました。

この時、神様のお告げにより水天宮(西方を守る水神)をお祀りし、両名の霊を慰めることに決めました。小樽の水天宮より御神体を受けて西村氏の地先に水天宮を祀りましたが、その後、石狩川治水工事のために移設しなければならなくなり、昭和二年(一九二七年)幌達布神社の境内に移設されました。

しかし、移設して間もなく佐々木勝太郎氏が石狩川に流され、地元の人々が懸命に探しましたが発見することはできませんでした。

人々は、「遺体も上がらなかったのは、水天宮を移設したことが神様の怒りを招いたのでは」と考えて、再び御神体を元の場所近くに戻すことになりましたが、不思議なことに神社に移す時は、四人でようやく担いだ御神体が、戻す時は二人で楽々担げたと伝えられています。その後、地元では七月五日を川祭りの日と決めて水難死した人々の霊を慰め、また、石狩川の安全を願ってお祀りを続けています。

幾春別川と石狩川の合流点を下流に移す、幾春別川水路事業が、平成四年(一九九二年)に始まったことにより水天宮の移設問題が生じたので、関係者が協議を重ねて平成十六年(二〇〇四年)に新水路左岸築堤(路側帯)に移設し、水天宮柱、新水天宮碑、水天宮川祭り由来の三本の碑が建てられました。

馬物語

農村の生活には、畑を耕したり田を起こすなどの農作業のほか、馬車や馬橇を引いて物を運んだり、人を乗せたり、農家の暮らしに馬はなくてはならない存在でした。北村地区開拓の歴史は、泥炭地や度重なる水害との戦いであったといわれています。また、原生林を切り開き畑にする仕事は苦労の連続で、切株を引き抜く仕事には馬の力が必要であったこともあって、開拓期における馬の働きの大切さは、今でも語り継がれています。

農家の人たちは馬を大切に扱い、人のために働いて亡くなった馬の霊を慰めるために、馬頭観音(馬頭観世音像)を建て、毎年お祀りをしていますが、初めは馬だけを祀っていました。その後、牛や羊などの家畜も合わせてお祀りするようになったといわれています。

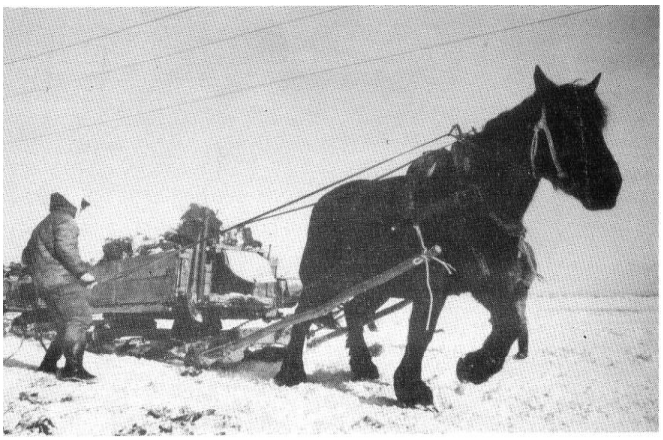
また、馬は賢い動物だといわれますが、北村から岩見沢へ物を運んでの帰り道、手綱を取る人が眠り込んでしまっても、馬は道を間違えることなく家に着いたとの話は数多く聞かれます。「一本道から脇道に入ることができたことを考えると、馬は賢い動物ということが分かる」と話す古老もおられます。とはいっても、中には家に着いた時、馬小屋に馬車ごと突っ込み、外すのに苦労したとの話も残っています。

馬の世話は子どもたちも手伝い、飼い葉用の草刈り、川辺での馬の身体を洗う仕事もこなしたといわれていますが、川への往き帰りに裸馬に乗った子どもたちも多かったそうです。

戦争中には軍の命令で戦争に出る馬もいましたが、ほとんどが帰らなかったといわれています。

戦争の影響が馬にまで及んだことは悲しい話です。

今は農耕馬はおらず、ばん馬(競馬)用の大きな馬体の馬が飼われているだけですが、馬が多くいた時は馬のひづめに蹄鉄を付けたり交換したりする仕事をする装蹄屋と呼ばれる人たちもいましたが、馬が姿を消すとともに姿を消しました。



北村と啄木

北村牧場の地先に、

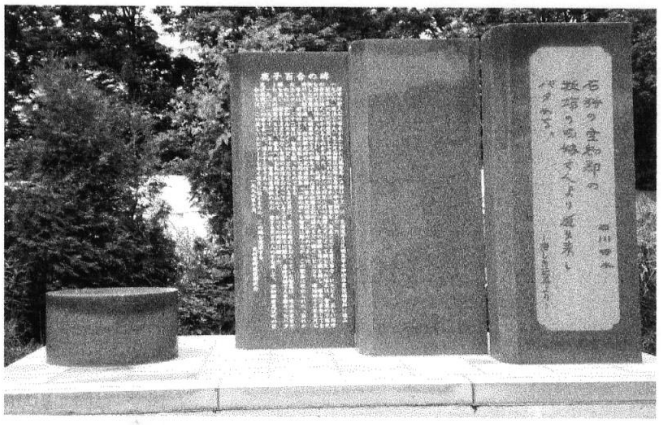
石狩の空知郡の牧場の
お嫁さんより送り来し
バタかな

と刻まれた石川啄木歌碑と鹿子百合の碑が、北村歌碑建設実行委員会により建立されたのは、平成十一年（一九九九年）十月のことでした。若くして没した歌人石川啄木ですが、函館区立弥生尋常小学校の代用教員をした折の同僚であった札幌平岸出身の橘智恵が、兄の学友北村牧場主の北村謹と結婚、後に上京した啄木が病に伏したことを聞き、夫の許しを得てバターを送ったことに啄木が感謝の便りを寄せ、後日、歌集『悲しき玩具』の中に『石狩の……』の一首が収められています。また、『鹿子百合の碑』は、啄木が智恵に対しての

印象を鹿子百合と表現したことによるものですが、啄木の智恵に対する思いは『一握の砂』の中に『忘れがたき人々』に歌われた二十二首からも明らかですが、一方の智恵は啄木の思いを受け止めていなかったことは、北村史の中にも明記されており、啄木の一方的な思い入れであったことが明らかです。

岩見沢駅の助役をしていた義兄宅を訪れ宿泊したものの、啄木は十数キロ先の北村牧場を訪れることはありませんでしたが、その胸中は複雑なものがあったことは容易に想像されるでしょう。

北村牧場に保管されていた、知恵が啄木から贈られた『一握の砂』、『悲しき玩具』の歌集とバターを戴いたことに対する礼状の葉書は、盛岡市渋民にある啄木記念館に安住の地を得ていますが、啄木が北村に足を踏み入れていなかったとはいえ、啄木と智恵のエピソードは空知野の一郭、北村の地で末長く語り継がれていくことでしょう。



北村と松浦武四郎

幕末の北海道(当時は蝦夷)探検家として名高い松浦武四郎は、幾度となく北海道を訪れ、北方領土の国後島や色丹島、択捉島にも足を延ばしています。幕府の命令により安政三年(一八五六年)五月九日、西蝦夷探検の途中、案内役のアイヌの人たちと現在の美唄達布の地先に野宿しましたが、翌年五月十三日、再び同地で野宿、この時は石狩岳(今の大雪山)に登り、石狩川の水源を確認する成果をあげています。これらの探検の報告書の中に北村の地に野宿したことを書き記し、『農耕に適した土地あり』とも書いており、北村の地が世に知られるところとなりましたが、今日の北村の美田を考えると松浦武四郎の眼力の高さには驚かされます。

千間道路

現在の道道六号線、岩見沢～月形線と、道道一三九号線、江別～奈井江線の交わる交差点、千間道路入り口から、石狩川古川の畔にある不動明王堂までの直線道路を、村民は親しみを込めて、『千間道路』と呼んでいる。道路の長さはおよそ千間(一八〇〇メートル)で、畳の長さに換算して縦に並べると、ちょうど千枚敷き詰める長さである。また、この道路と平行して水害対策のために掘られた排水溝も、『千間排水』と呼ばれて親しまれている。

この道路は明治三十三年(一九〇〇年)七月、北村が岩見沢村から分村する以前に、すでに掘削されているが、正確な年次の記録は残っていない。起点になっている道道六号線と岩見沢～月形線との交差点周辺は低湿地であり、毎年のように水害で悩まされていた。しかし、当時の人々にとってこの道路は、千間排水を掘削した時の残土を土盛りしただけの獣道であったが、戸長役場に通じる唯一の道路であり、

人や馬などが通る重要な道路としての役割を担っていた。また、当時は岩見沢から北村にやって来る人たちは、千間道路の突き当たりにある不動明王堂が見えてくると、ようやく北村にたどり着いたことへの一つの目印として安堵したと、古老たちの記述に残っている。

この不動明王堂は、かってこの地域で亡くなった、ある婦人の冥福祈願のために、開村時のころに建立されたのが始まりであると記述されている。

その後、お不動さんを信仰する地域の人たちは、千間排水掘削工事に従事し、過酷な強制労働の犠牲となった土工夫たちの冥福を祈ることを合わせて、お詣りするようになったと伝えられている。

開拓祈念不動明王堂

また、農場の人たちはこの不動明王堂を豊作祈願のために、毎年二百十日(九月一日)の厄日を祭日と定めてお参りをし、今も地域の人々は大切にお祀りしている。この場所には今も北村では最大級といわれる改良ポプラの大木をはじめ、アカダモ(ハルニレ)など数本の大木がそびえ立っていて、開拓当時の面影を偲ばせている。

北村の泥炭と埋もれ木

北村農業資料館展示室に、シンボル的な存在として巨大な『埋もれ木』の標本が展示されています。この標本は、現在では公園やパークゴルフ場として整備され、市民の憩いの場として親しまれている、西川町のひょうたん沼付近の泥炭層の下から、昭和五十年代後半に発見された埋もれ木のうちの一本です。

この地区から北村地区にかけての一帯は、典型的な高位泥炭層の広がる地域で、大きな沼や三日月湖が点在し、その周辺の多くは湿地に覆われていて、農地として開発が急がれる地域として計画されていました。ちょうどこの時期に始まった圃場整備事業の工事中、泥炭層の中からこの埋もれ木が発見されたのです。根元の外周が約五・六メートル、直径約一・八メートルで、推定樹齢五～六〇〇年のタモ類の一種といわれています。

また、この時期北村では、農業資料館建設の機運が高まり、計画が本格化して、実現に向けて展示資料の収集に力を入れていた頃でしたので、資料館の展示品のひとつにしたいということで、この埋もれ木を譲り受けたとのことです。農業資料館のオープンに合わせて、掘り

出した埋もれ木の搬入を開始し、展示の準備が行われましたが、長い年月泥炭の下に埋もれていたため、腐食や傷みが烈しく、展示に堪えるように手入れをするのに大変な苦労があったと伝えられています。

表面をていねいに削り取り、ガスバーナーで焼いて形を整えて磨きをかけ、やっとの思いで展示にこぎつけたとのことです。

その結果、現在展示している標本は、発見当時の大きさから平均して三〇～五〇センチほど表面が削られ、実際よりかなり細くなったといわれています。単純に計算して、表面全体が平均四〇センチずつ削られたとすると、埋もれていた時の大きさは、根元の外周が八メートル以上、直径三メートル、樹高三〇メートル以上の巨木であったことになります。幹周りを大人が手をつないで取り巻くと、五～六人でやっとというところでしょうか。標本の手前の丸太は、直径二十五センチの標準的な大きさのシラカバの標本です。これと比べてみても、この埋もれ木がいかに巨大なものであったかが理解できると思います。

泥炭の分類はその成因に基づいて通常、低位泥炭、中間泥炭、高位泥炭の三種類に分けられています。仮に図❶のような沼や半月湖があったとします。周囲は浅く、中央に行くほど深く、底部は盆形をしています。その周囲にはこの状態に適したヨシ、スゲ、イ、ガマなどの植物が生育します。

これらは夏に旺盛に繁茂し、密生して群落を作り、秋に枯れて水中に沈積します。これを年々繰り返すことによって、これらの植物を主体とした泥炭ができます。

この堆積物は風や水の動き、火山活動、水中動物の働きなどによって底の土と混じり合って層を作ります。これが泥炭層生成の第一歩であり、その層の形成は圧縮を重ねながら、百年間に約一〇センチほどの遅々としたスピードで堆積され、数千年をかけて厚さ数メートルに及ぶ泥炭層を形成します。この層が厚く発達すると沼は浅くなり、やがて沼全体がこれらの植物の残体で埋められて陸地化していきます。

この時代を『低位泥炭』(図❷)と呼んでいます。

沼が陸地化してくると、比較的乾燥地に適したスギゴケやチリメンゴケなどの苔類、ツルコケモモなどの小低木類が発達し、それとともにハンノキやヤチダモ、ヤナギなどの樹木も生育に適するようになり、これら樹木の葉や幹、枝などが泥炭層の上に堆積して層をなしていきます。

この層が厚くなると養分の供給が思わしくなくなり、

❶沼・半月湖

❷低位泥炭

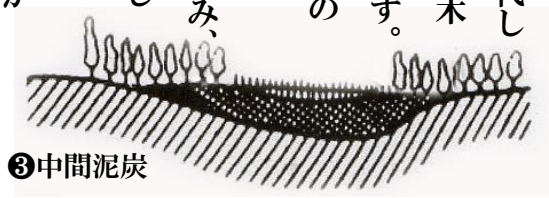
比較的養分の少ない所でも生育できる松、樺などと交代していきます。そして、乾燥度が進むにつれて、これらの樹木の発達が旺盛になり、ついには森林を形成するに至ります。

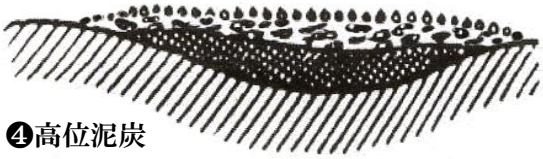
この森林は、泥炭発達の過程にできるものですから、この状態の泥炭を『中間泥炭』(図❸)と呼んでいます。

森林の時代がしばらく続くと、下部の泥炭の分解も進み、質も密になり、水分の流通を妨げ、表面が再び湿潤化して、時には表面に再び水たまりができてきます。

やがてこのような土地に好んで生育する、ミズゴケ類が繁茂します。この時期になると森林の下部はミズゴケ類の海綿で詰め込まれた状態になり、樹木は呼吸困難となり、ついには枯れて地上に倒伏するに至ります。ミズゴケ類はさらにその上を覆い倒木を分解しやがて森林は消え失せて、ミズゴケ類の大原野と変貌していきます。この時期は泥炭発達の末期で、地表面がかなり高く盛り上がった状態になるので、『高位泥炭』(図❹)と呼んでいます。

これは泥炭形成の典型的なパターンであって、河川の氾濫や火山の爆発に伴う火山灰の被覆などの要因により、低位から直ちに高位に移ったもの、中間のままで止まったものなど様々な様相が見られます。


❸中間泥炭


❹高位泥炭

北村農業資料館に標本として展示されることになった埋もれ木の標本は、ひょうたん沼周辺の高位泥炭層の中から、たまたま発見されたものですが、この地域一帯はこのような土地がほとんどで、北村地域全体の泥炭地のおよそ七十五パーセントが高位泥炭層であったといわれています。明治時代の開拓期初期から、この地域では埋もれ木の出土は決して珍しいことではありませんでした。

開拓者たちはうっそうと茂る大木を一本ずつ伐採し、熊笹の刈取りに精一杯取り組み、原野をわずかずつ切り開いて耕地を拡げ開墾していったのです。しかし、その開墾の妨げになった埋もれ木の処分には、ずいぶんと悩まされたと伝えられています。森林の樹木は鋸や鉞を使って伐採し、時間をかけて乾燥してから一か所に集めて火を放ち、焼き払うことで始末することができます。人力とせいぜい馬の力を借りて、夜も寝ずに血のにじむような苦労を重ねて原野を切り開き、やっとの思いで開墾までこぎつけたわずかな土地の一角に、突然長さが三〇メートル以上、直径三メートルもの大木が横たわっていることを知った開拓者たちの驚きと当惑、その落胆ぶりは想像を絶するものであったと思われます。

中小屋　ある農民の物語

これは大自然の酷しい条件下を生き抜いてきた一人の開拓農民の物語である。当時の開拓者はほとんどがこれと大同小異の環境にあった。秋の夜は長い。庭のポプラを打つ木枯らしの音も寒々として、雪の近いことを告げている。

五十歳を越えたばかりだというのに、坊主刈りにした頭には白いものが目だち、真っ黒に日焼けした顔に刻まれた数々の皺は、雪国の厳しい四季を大地と共に生きてきたことを物語っており、体に似合わない大きな手、節くれだった指、それらの一つひとつに未開の大地を切り開いてきた苦労の跡がにじんでいた。湯渋に黒ずんだ湯飲み茶碗を手に、冷えかけたお茶を一口飲んだ彼は淡々と語り始めた。

私は明治十二年、能登半島に生まれた。物心がついた時には既に父はこの世の人ではなかった。その後母と三才年上の姉の野良仕事でかろうじて生きてきた。いや、飢えを凌いでいたという方がよいだろう。

やがて私も働きに出るようになり、どうにかその日の糧には事欠かないようになったと思ったら、母は風邪がもとであっけなく世を去った。

十六才の時のことである。貧しい農家の姉弟にどのような生き方があったか。とにかく地主の理解や村人の温かい情で、姉は間もなく嫁ぎ私は細々と生きてきた。長男であったことから徴兵を免かれたので、やがて妻を迎え子どもも生まれたが、貧しさは増すばかりであった。

ちょうどこの頃、北海道移民の話があって心機一転、新天地への移住を考えたが、折り悪しく日露戦争の勃発で足止めされ、空しく三年余りの月日が過ぎ去った。

明治四十年の春、私は妻と三人の子どもを連れて海を渡った。しかし、そこには私の夢見ていた大地ではなかった。条件の良い所は既に多くの団体、企業、屯田兵などによって占有されており、残された土地はとても生活できるような所ではなかった。といっても今更帰郷するわけにもいかなかったので、伝手を求めて岩見沢郊外の『野の沢』という所に借地入植した。そこは山間の僻地で時折熊も出没し、青大将が毎日ネズミを追って家の中まで入ってくるという所であった。

私はここで五年間死にもの狂いで働いた。幸い天候にも恵まれたこともあって、どうにか自立の目途が立ってきた時、この中小屋の土地払い下げの話を耳にした。無償ということが何よりの魅力で、土地の事情も知らぬまま二十町歩余りを手にした。

明治四十五年夏のことであった。翌大正二年の早春、私は希望に燃えて家財道具、食料、営農資材を馬橇に載せ、子どもの手を引いて五里余りの道を一日がかりでこの地に着いた。とにかく住む家が必要だ

ったので、最も簡単な『おがみ小屋』を建てることにしたが、この土地には樹木が多く、また、湿地に生えていた葦が大いに役立った。こうしてどうにか住む家ができると今度は開墾である。

立木を切り熊笹を刈った跡を耕すのであるが、木や笹、草の根が一面に這っていたので大鍬を使って耕地し、そこに蕎麦や麦、唐黍、大豆、小豆、野菜などを蒔いたが、運の悪い時は仕方がないもので、この年は全道が大冷害で、真夏にも炉火が必要な日が続き、太陽が顔を出した日は数える位しかなくて、折角蒔いた作物もわずかの蕎麦と野菜を除いて収穫は皆無であった。

手持ちの穀物などでどうにか飢えを凌いだが、五人もいた子どもたちが無事だったのは不思議な位であった。次の年からは天候に恵まれたこともあって開墾は順調に進んだ。そのうち子供たちも成長し、上の方から農作業の手伝いをするようになったので、耕地はだんだん多くなってきた。そこで谷川の水を利用しての水田造りを始めたが、地形も良かったので水稲がよく育った。

やがて、世界大戦の影響もあって、農作物の価格も高くなってきたので生活もだんだん楽になってきた。

その間たびたび水害もあったが、大正十一年夏の石狩川の氾濫による大洪水は、家の窓辺りまで浸水し、田畑の作物をことごとく流してしまった。

ようやく稔りはじめた水稲や大豆、小豆、唐黍などが見るみるうちに水没し、刈り取りを終えて積み重ねてあった燕麦の山が、木の葉のように流れていくのを見た時は涙が止まらなかった。

こうしたなかにも水田の造成も進み、耕地も増え収入も増えてきたので大正十三年春、ようやくこの家を建てることができた。

かくして入植十八年、私もどうにか人並みの生活が出来るようになったが、その陰には妻や子どもの大きな協力があったからで、その点ありがたいと思っている。

語り終えた彼は、煙管に刻み煙草を詰め、うまそうに二、三服吸ってから立ち上がり、縁側の外を眺めながら、フーッと大きくため息をついた。夜は更けて、木枯らしの音も絶え、家族もそれぞれ眠りについたのか、静寂が時の流れを止めているかのようであった。

北村に熊がいた

北村農業資料館の展示コーナー『自然と大昔』に、熊（エゾヒグマ）の剥製が展示してあります。

この熊は北村地区で捕獲されたものではなく、北村から遠く離れた三笠市桂沢本流（桂沢湖より約二十六キロメートル地点）で昭和五十五年に北村のハンター数名によって射止められたものです。推定年齢は十六～七歳、推定体重が四五〇キログラムの国内で展示している熊の剥製としては、最大級のものです。北村地域には、かつて狐森という地名（今は北都）があったように、今でも狐の姿を多く見かけますし、まれに鹿が姿を現すこともあります。しかし、この地域は西側を母なる大河石狩川が流れ、反対側は美唄、三笠、岩見沢、栗沢に連なる山々に挟まれた、石狩低地帯と呼ばれている広大な平地の一角に位置しています。

剥製（北村農業資料館）

従って、かって石狩川が蛇行して流れる時に形成されたタップと呼ばれる小高い丘以外は、山らしいものはひとつもない、泥炭地と森林におおわれた平坦な土地でした。とても熊の生息する環境ではありませんでした。それでも、開拓が始まった明治二十、三十年代以降に石狩川沿いなど、ごく限られた場所で熊を目撃したという古老の話が、数少ない記録の中に残っているのです。

豊正地区の古老は、つぎのように話しています。

「小学校に入る前のころ、石狩川の川辺で遊んでいると、近くの林の中から子熊が出て来て寄って来た。姿を見せなかったが、母熊と思われるうなり声が聞こえたので、怖くなって家へ逃げて帰った」

また、豊里地区の古老も、つぎのように話しています。

「わたしの母親が三百間（四～五百メートル）ほど離れた家へ遊びに行くと言って、わたしを連れて行ったんだ。帰りに川の方を見ると、子熊が水を飲みに来ていた。それを見て母親はおっかなくて帰られないので、その家の人に送ってもらって、やっと家に帰ったことがあったよ。

この辺は当時、荒れ地だったから熊がいたのでしょう。わたしの隣の池田さんが、三百間ほど先にトウキビを二反（二アール）くらい作っていた。それを熊が片端からビリビリと、食べるんじゃあなくて、ただちょっとしたところをかじって、みんな倒してしまった。そういうこと

をした跡を見たよ。また、この荒れ地の所にいい草が生えているので、それを刈って馬に喰わせようと思って、その荒れ地に入ったんですよ。そしたら、今歩いたばかりの熊の足跡が、ポコポコと草の中にあるんです。おっかなくてとんで帰ったこともあるよ」

石狩川からだいぶ離れた中小屋地区には、次のような話が伝えられています。ヒグマで有名な北海道にあって、ここ中小屋の地は近辺に山がなかったことと、たびたびの洪水の関係で、ヒグマは全く生息していなかったし出没したこともなかった。ところが、昭和十一年の秋のある日、隣接の北村大願部落の畑に一頭のヒグマが現れた。

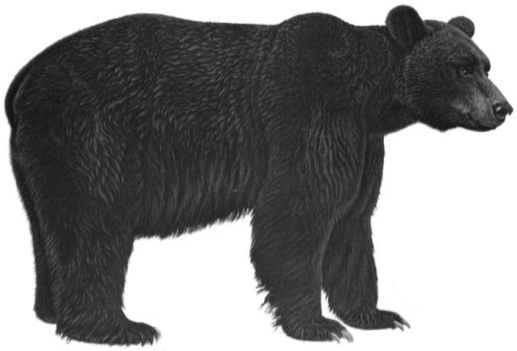
部落の歴史の中で初めてのことであり、大騒ぎとなって青年たちは好奇心をもって、手に手に鍬や鉈を持って現地に駆けつけた。

ようやく稔りに入ったトウモロコシが一反歩余りに亘って、喰い荒らされていた。この年は、陸軍大演習が岩見沢付近を中心に、この辺りを含めて繰り広げられることになっており、天皇の来道が予定されていた。そのため、部落にあった一、二挺の猟銃の弾薬は、村の駐在所に引き上げられていたので、岩見沢から専門の猟師二名に来てもらい、みんなと一緒に夜半まで探したが、ついに発見することができず、住民たちは不安な夜を過ごした。

翌朝、八キロあまり離れた石狩川のほとりに現れたところを射殺され、騒ぎにピリオドが打たれた。

しかし、これには続きがあって、このヒグマを撃ったのは、北村一区の青年だったが、当然駐在所に引き上げられていたはずの弾丸が、どうして手元にあったのかと問題になった。結局、ヒグマが捕れたのであるから始末書で終わったとのことである。

今でこそ石狩川の川辺に大きな森や林はありませんが、開拓が始まったころは原生林がつながり、ヒグマが往来してもおかしくない自然環境であったのでしょう。



囚人の功労による戦後開拓

北村地域は、村全体の約八割の面積が泥炭土壌で、現在は北村の中心地となって、美しい田園風景が広がっている赤川地区は、開拓当時はほとんどが高位泥炭層で、他の地区と比較して開拓が困難な土地の多い所とされてきました。

太平洋戦争が終結した昭和二十年（一九四五年）以降、開拓の遅

れていた赤川地区の一部に、樺太や満州などからの引き揚げ者や、三笠市の幾春別川上流に桂沢ダムを建設することによる集団移転者、そして国内の他府県からの移住者が開拓者として入植してきました。入植当時は高位泥炭に覆われ荒れ果てた原野で、その開墾には計り知れない苦労があったと当時の古老からよく聞きました。

これは昭和二十五年春のこと、赤川地区現在の道道六号線、岩見沢～月形線沿い、（今の赤川ユニオンドライセンター斜め向かい）の草地に木造でバラック造りの家が建てられました。これは赤川原野の開拓のため、排水路の掘削整備事業の作業員として送られてきた苗穂刑務所の受刑者五十名余り、いわゆる囚人一行のための宿舎でした。

囚人のほかに刑務官五～六名がついていて、囚人たちはみな紺色の作業服姿で、毎日厳しい監視のもとに過酷な作業に従事しながら規律正しい生活をしている姿に、当時を知る地域の人々は、その光景を忘れることができないと言っております。

初年度の作業は五月から十月末まで、千間道路の延長線、現在の北村上水道配水池から大願方向の三〇〇〇メートルと、赤川幹線

排水、現在の『森々パークゴルフ場』から大願方向の二三〇〇メートルの排水路掘削に当たったそうです。掘削工法は法面なしの角堀りであったといわれ、すべて手掘り作業によって掘削したそうです。

囚人たちは、大きな排水路の掘削作業が完了する秋の終わり頃には、苗穂刑務所に引き上げていきました。

この二つの排水路は今でも囚人排水と呼ばれています。

翌年春になると一行はまたやってきて、前年の手直し作業と千間道路沿いの排水溝一八〇〇メートルの床下げ掘削を、前年と同じように角堀りで仕上げ、二年間にわたる排水整備が完了しました。

このことにより、赤川地区の泥炭地が一気に開発され、開拓が進みました。現在では幾度かの改修工事が行われることによって、排水溝も平行して通る道路も、今では当時の面影を偲ぶことはできませんが、今日この地域の美田を考えると、先人の苦労と共に、囚人たちが戦後開拓の陰の功労者として、その一役を担っていた功績を、これからも末永く語り継がれてほしいものです。

石狩川と北村

北海道のほぼ中央部、大雪山の山懐を源として、三六五キロメートル(現在は二六八キロメートル)を延々と流れ下り、石狩湾に注ぐ大河石狩川。その流域には渓谷を切り裂くような荒々しい流れの上流部、吸い込まれそうな青く淀んだ淵、樹海を縫うように複雑に流れる中流部、砂浜のように広がる川原を滔々と流れる下流部など、多種多様な景観が繰り広げられていました。中でも中流域から下流部においては、有史以前より長い年月を経て石狩川の原形が形成される過程にできた、タップと呼ばれる小高い丘が、あちらこちらに点在していて、石狩低地帯のほぼ中央に位置する北村付近には、袋達布や中島、巴農場など比較的大きなタップがいくつもありました。

タップを廻るようにして流れていたかっての石狩川は、湾曲した外側は流れが速く川岸をどんどん浸食して益々大きく湾曲したり、流れの遅い内側は土砂や流木など様々な堆積物で覆われ、タップを切り離して流れを変えるなど多様に変化し、川はますます複雑に蛇行していきました。また、その石狩川に美唄川や幌向川などの大きな支流が直接流れ込み、その支流に利根別川や幾春別川、清真布川、赤川など、数多くの川が流れ込んでいました。そのため、一度台風や集中豪雨、春の急激な雪解けによる増水などに見舞われると、各支流から水が一気に流れ込み水かさが増します。すると石狩川は堤防や排水溝の決壊、時には川の逆流による異常な増水で、家屋や田畑の冠水や水没、流失など、開拓期以来繰り返し起こる水害に人々は悩まされてきました。

大沼橋上空からの三川合流地点

川はたいてい厳冬期になると、凍結して雪に覆われてしまいますが、今の石狩川が冬になっても凍結しないのは、大掛かりな河川改修事業によって、タップを切り離して出来るだけ真っすぐな流れになるようにしたからです。それは北海道開拓当初から幾度となく繰り返し

見舞われてきた大水害を解消するのが大きな目的でした。

川の改修工事によってショートカットされ、高い堤防が築かれた石狩川は、川底が深くなり、流れも速くなって、以前のような水害が少なくなりました。その代わり、冬になっても凍結することがなくなりました。この捷水路設置や水路変更などの工事によって切り離された川の一部はほとんどが埋立てられ、耕地へと様変わりしましたが、しのつ湖や雁里沼、旧石狩川(巴農場河跡湖)などのように、三日月湖、または古川として残され、潅漑用溜池や公園などに有効活用され、かすかに昔の面影を偲ぶことができます。

石狩川　渡し舟と氷橋

石狩川の左岸に位置する北村は、右岸の月形町や新篠津村と川を挟んで向かい合い、古くから人々の交流が盛んに行われていました。

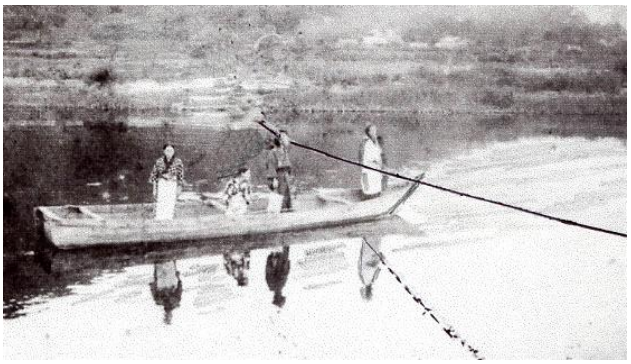
石狩川に橋が架かる前は、『渡船』と呼ばれた渡し舟が往来し、人や物資を運んでいました。初めの頃は、川の流れの変化を読みきれず、舟が川の流れに逆らえず、対岸の目的地点まで、うまく行きつくことができないなど、舟を操る船頭さんはたいへん苦労したといわれています。やがて川の両岸にワイヤーを張り、滑車を利用して川の流れをうまく利用して渡るようになりました。

冬になって流量が少なくなり、上流から氷が流れてくるようになると、これがタップ付近に停滞し、折り重なるようにして川面を埋め尽くしてしまい、その上に雪が積もると渡船は春になって氷が融けるまで運休することになります。

川面全体が結氷して人が通れるようになると、小柴や柳の枝を敷きつめて雪を乗せ、さらにその上に水をまいて凍らせて頑丈にすると、幅二、三メートルの『氷橋』と呼ばれる氷の道ができます。

一面に雪が積もると、どこが道だかわからなくなります。そのために氷橋の両側に木の棒を目印に立てておいたそうです。この氷橋を利用して人々はもちろん馬や馬橇も対岸に難なく渡ることができたということです。氷橋は渡し舟の船頭さんたちや地元の人たちが協力して作ったとのことで、氷橋を作るための手間賃と材料集めの費用にするために、氷橋を利用する人は渡り賃を支払ったそうです。ちなみに渡り賃は渡船の運賃と同じ金額だったということです。

長い冬も終わり川のあちこちから水面が顔を出します。



しかし、頑丈に作られた氷橋はまだしばらくは渡ることができます。

やがて彼岸も過ぎ土手にフキノトウが顔をだし、川面に厚く張った氷に割れ目ができて水の動きが始まるころになると氷橋の役目が終わります。

そして、冬の間運休していた渡し舟の活躍が始まるのです。豊正地区を初めとして豊里地区や幌達布地区など、渡し船のあった所では氷橋が作られ、北村の風物詩となっていましたが、橋の完成によって、渡し船の姿と共に氷橋は姿を消し、人々の記憶に残るだけになりました。

《参考》

昭和二十三年（一九四八年）　木製の月形橋（吊り橋）架設

昭和三十五年（一九六〇年）　岩見沢大橋完成

昭和四十四年（一九六九年）　月形大橋完成（初代）

平成十二年（二〇〇〇年）　大沼橋完成

平成十六年（二〇〇四年）　たっぷ大橋完成（岩見沢大橋を改名）

平成二十五年（二〇一三年）　月形大橋完成（二代目）

ジンギスカン料理 発祥の地　北村

北村の発祥と村名の祖、北村雄治により開設された北村農場では緬羊飼育が盛んに行われ、羊の毛を利用した純国産ホームスパンブームの到来であった大正時代に、緬羊飼育で名を発した北村は、紡毛・染毛を経てホームスパンの織製まで、一貫して行っている村として、日本全国に知られるようになり、その中核である北村農場には、全国から数多くの視察者や見学者が訪れるなど、技術提供や実演、そして講習会などを開いていた。

このホームスパンが、皇室御買い上げの栄に浴したことから、北村農場は益々有名となり、多忙な日々となってきた。従って純国産ホームスパン発祥の地（ルーツ）は北村であったことが、北村農場産業組合日誌に記述されている。緬羊飼育が盛んになるにつれて、牡羊や老羊をどう活用したらよいか頭を悩ませていた。

我が国では、ずっと以前より牛肉を『黒牡丹肉』と称し、薬として用いていた記録があり、『牛肉丸』という売薬もあったことから、一般

には獣肉を食べる習慣はなかったようである。ところがある時、当時の空知農業学校（現在の岩見沢農業高等学校）に解剖用として羊を寄贈し、その時羊肉が食されたことから、北村飼羊組合が総会後初めて試食されたことが、当組合日誌に記されている。その後農場内では大正から昭和時代にかけて、羊肉料理法がいろいろと試されており、中でも醤油味の網焼きが一番癖のないことから、農場に来られるお客様のおもてなし料理として、普及したといわれている。

このころほかの地域では、羊肉を食べる習慣がなかったことから、北村が羊肉料理発祥の地といっても過言ではない。さらにはジンギスカン料理発祥の地は、北村であるといえるだろう。

里山物語

「じいちゃん、今日はどんなお話？」

「そうじゃなあ、何を話そうかのう。そうじゃ、じいちゃんがお前たちと同じくらいの頃に、本当にあったお話を聞かせよう」

「へえ、それって怖いお話？」

「そうさなあ、ちょっと怖いかもしれんなあ」

「いやだあ、今晩眠れなくなっちゃうよう」

「ハッ、ハッ、ハッ、うそじゃ、うそじゃ」

夕食が終わって一服しているおじいさんの周りには、いつものように孫たちが、おじいさんの昔ばなしを楽しみに集まっています。

「じいちゃんが子どもの頃は、この辺りにはまだ田んぼも畑も少なく、森や林が広がっていて、大きな木や小さな木がたくさん生えていたんじゃ。林のそばに谷川が流れていて、小さな沼や水たまりがあちこちにあったんじゃ。春に雪が解け始めるころになると、ウドだのワラビやゼンマイなど、色々な山菜がいっぱい生えているので、よく採りにいったもんだよ。ある日、谷川から流れる水がたまった小さな沼のふちで、セリを摘んでいたとき、「ギャー、ギャー、ゲー、ゲー、グワッ、グワッ」

という音をごちゃ混ぜにしたような賑やかな音が遠くの方から聞こえてきたんじゃ。この辺りは、昔からハクチョウやガンが渡って来ていたので、てっきりそうだと思って、きっとたくさんの渡り鳥が沼に集まっているのだろうと近づいてみたんじゃ。するとどうじゃろう。

ハクチョウもガンの姿が一羽も見当たらない。音だけはますます大きくなり、耳を塞ぎたくなるようじゃった。音のする方にもっと近づいて見ると、沼の水面がザワザワ、バシャ、バシャと波立っているではないか」

「じいちゃん、何がいたの。恐いもの？」

「何だと思う、それはなあ、じいちゃんもびっくりしたんじゃが、カエルじゃよ。それもなあ、十匹や二十匹じゃあない。何百匹いるのか、とにかく数えきれないほどのカエルが、沼一面で鳴いたり飛び跳ねたり、追いかけ合ったり、大騒ぎをしておったのじゃ。あんまり賑やかなんで、それはそれは、たまげたよ」

「それで、じいちゃん、どうしたの」

「うん、何事かなあと、しばらくじっと見ていたけど、採ったセリを持って帰らなけりゃあならないので、急いで家に帰ったさ」

「ふうん、じいちゃん、その後でまたカエルさん見に行ったの？」

「もちろん行ったさ」

「どうだった、どうだった。カエルさんどうしてた？」

「そうじゃなあ、あれはたしかお祖母ちゃんと一緒にウドとワラビを採りに行った時の事じゃった。帰りにあの沼に寄ってみたが、カエルは一匹もいなかったし、鳴き声も全然聞こえないんじゃあ。変だなあと思って、もっと水辺に近づいて見たんじゃ。するとどうじゃ」

「どうしたの、どうなってたの。カエルさんは？」

「カエルはいなかったけど、沼一面に小さなオタマジャクシがいっぱい泳いでいたんじゃ。それは、それは可愛かったよ」

「ふうん、でもカエルさんはどうしていなくなったんだろうね」

「そうだね。じいちゃんも不思議に思って、お祖母ちゃんに聞いたんじゃよ。それはなあ、カエルは春の雪解けのころ冬眠から覚めると、子孫を残すために水辺に集まり、雌と牡のつがいになって卵を産み終わると、もう一度地面の中に戻って、温かくなるまで眠るんだそうじゃ。その間に水辺に産みつけられた

卵は孵化してオタマジャクシになって、自分の力でカエルになるまで、水の中で生きていくのだそうじゃ。足が生えてカエルになるまでなあ」

「ふうん、だからまだ雪のある春の始めにカエルさんたち、たくさん集まって鳴いていたんだね。そうか」

「さあ、もう寝る時間じゃ。そうじゃ、田んぼでカエルが鳴いているかも知れないぞ。行ってみようか」

「うん、じいちゃん、行こう、行こう」孫たちは先を争って家の前の田んぼに続く小道に向かって駆けて行きました。

月明かりの田んぼのあちらからも、こちらからも、カエルの大合唱が響き渡っていました。

鏡沼物語

北海道6号岩見沢月形線(通称岩月線)と呼ばれている道路のほぼ中間地点に北村の市街地があります。その市街地から月形に向かって行き、旧美唄川に架かる北栄橋を渡ると、間もなく左手に小さな森が見えてきます。そこはこの村を興した地主である北村さんの地所で、森の中には鏡沼と呼ばれる丸い大きな沼があり、木立に囲まれた湖面はいつも静かで鏡のように周りの景色を映しています。

村ができてしばらくしたころ、近くに住む農家の若者に嫁を貰いたいということで、家の人は周囲の人に「よいご縁を」とお願いしておりました。当時はお嫁さんを貰う時も、お嫁に行く時も本人は二の次で、家と家とでそれぞれの家の人が話を進めるのが習慣で、相手を決めるのは主に祖父母や両親の役目でした。そのころは世話人といわれる人がたくさんいて、やがて三人の世話人からそれぞれ村の娘さん三人を勧められました。家の人は三人の娘さんの顔を知っていましたが、くわしいことはあまりよく知りませんでした。

一人目の話は、村でも評判の器量よしで容姿も申し分なく、家の人は「あんな娘さんがうちの嫁に来てくれたら」と思いました。

二人目の話は、ごく普通で十人並みの娘さんでした。三人目の話は、美人とは言いがたく元気で働き者という評判の娘さんでした。みんな良い話なので家の人はだれに決めて良いか悩んでおりました。

村の人はみんな農家で、暮らし向きに大差はなく、農作業は馬と人の手でしたので農繁期には互いに助け合って仕事をしておりました。その日は地主さんの家の田植えで、若者の家からは若者と祖母が手伝いに

来ていて、村の若い者も大勢田植え姿で集まっています。そのころの田植えは素足に素手でしたので、昼と夕方には仕事が終わると井戸ばたで手足を洗うのですが、人が多いので半数は近くの鏡沼へ下駄を持って行き、岸にある木組みの台の上でみんなワイワイ、ガヤガヤと手足を洗っておりました。娘さんたちは被り物を取っていて、その中に評判の美しい娘もいました。祖母は「よい娘さんだ」と思い、下を向いて手足を洗っている水面に映った娘の顔を見ると、さざ波のせいか口が大きく目が吊り上がってとても怖い顔だったのでゾッとしました。

家に帰ってもあの怖い顔を思い出して眠れませんでした。次の日も二人は地主さんの田んぼへ田植えの手伝いに出向きました。祖母は心やさしい人で、若い人の邪魔をしないように沼へ行って手足を洗っていました。この日は偶然二人目に話のあった娘が隣にいて、祖母に気を使ってやさしくしてくれました。水面に映った顔も変わりなく、とてもうれしくて家に帰ると「あの娘さんならいいな」と思いました。何日かして田植えも最後の日になりました。

祖母は仕事が終わっていつものように沼へ向かいました。先に来て手足を洗っている娘さんたちに交じって三人目に話のあった娘さんが祖母の向かいにいました。下を向いているので水面に映った娘さんの顔を見ると、とても美しく祖母がつい見とれていると、娘さんは顔を上げてにこっと微笑みました。夕日に照らされた笑顔は今までに見たこともないやさしい女性の顔でした。

祖母は「あの娘を何とか若者の嫁に」と心に決めました。

秋が終わると家のみんなで話し合い、元気で働き者の娘さんに決めて話を進め、春近い雪解けが始まった頃、若者はめでたく働き者の娘さんを嫁に迎えて暮らしておりました。

何年かして若者は村の古老から鏡沼のふしぎな話を聞きました。

鏡沼の水に映った顔は自分では分からないが、他人が見るとその人の本当の心が写っているという話でした。

若者が家へ帰ってその話をすると祖母は、あの夏の沼に映った娘さんの顔を思い出して、それを自分の心の宝として大切にし、若者と家の人には我が家の宝だと思ってお嫁さんを大事にするように言いました。何も知らない若者は祖母がよい嫁を選んでくれたことに感謝して幸せに暮らしました。

いつの頃からか鏡沼のこの話が広がり、だれも沼に近づかなくなりましたが、今ではそんな話も忘れ去られてしまい、わずかに古老たちの間で語り継がれるだけになりました。

現在の鏡沼

幌向太物語

幌向の市街地から国道十二号線を札幌に向かって行くと、次第に人家がまばらになり田園風景が広がる辺りで小さな橋を渡る。下を流れるのは旧幌向川である。その川を下って行くと、ほどなく左に折れ曲がるようにカーブする辺りに大きな沼が見える。巴農場河跡湖という農業用溜池である。

昔、石狩川は現在の巴農場（江別市）を取り囲むよう迂回して流れていたが、巴農場捷水路が開通することによって湾曲部分が切り離されてその上流部分が半月湖となり、湾曲部分の先端に合流していた幌向川は、半月湖の反対側の古川の方へ流れを変えた。地名のいわれには諸説あるが、古くは近くにアイヌのコタンがあって、この地をポロ、ムイ、プツ（大きな曲がりくねった川の本流に支流が流れ込むところ）と呼んでいたことから、『幌向太』と言うようになったようである。

旧石狩川

当時の交通手段は水路が主役で石狩川に蒸気船が通い、幌向太にも船着場が設けられ、貨物倉庫、住宅、休泊所、水位観測所とそれに伴う役所が置かれ、日本の近代化に欠かせないエネルギーの石炭を搬送するための鉄道や道路のルートや、調査と工事のための現地第一基地が作られた。その頃は岩見沢の地にはまだ開拓の鍬が入っておらず手つかずの地であり、最初に人が住み役所が置かれた幌向太は、『岩見沢発祥の地』であるといえよう。また、当時の幌向川は川幅も広く現在とは比較にならないほど水量が多く、川を小舟で溯って上流部の美流渡や万字の方まで行くことができるほどの大きな川で、途中の要所にはいくつもの渡し場があり、調査や資材補給など、幌向太と未開発地とを結ぶ水運や交通に重要な役割を果たしていた。数年にわたって開発の支援基地だった幌向太も、明治十五年（一八八二年）十一月、手宮～幌内間に石炭の積み出しのための鉄道として官営幌内鉄道が開通し、同年幌向太駅が開業した。

やがて鉄道工事や道路のルートが完成すると、役所も次々と撤収されて幌向太は船着場だけになった。幌向太駅は簡易停車場として設けられ、現在の幌向駅より八〇〇メートルほど江別寄りの幌向川右岸近くで、駅舎は線路の北側、幌向太の近くに設置されていた。

翌明治十六年（一八八三年）に幌向駅と改称し停車場となって明治二十六年（一八九三年）現在地に移転した。

明治三十三年（一九〇〇年）、北村が岩見沢村から分村する際、幌向太はその境界線の起点となり、このことによって幌向太は岩見沢、江別、北村の三つの村境界の要に位置することになった。そして、この直線は陸上では日本一長い直線境界線になったとのことである。

岩見沢への入植者第一号として広く知られている原田喜助さんは鉄道開通の年に入植し、現在の北村砂浜地区の石狩川沿いに開拓の鍬を入れたと伝えられている。原田さんは小樽で船頭をしていたが、開拓者を目指して江別までやってきて、そこの船着場から単身小舟を操って石狩川をさかのぼり幌向太までやってきた。石川県出身で若干二十五歳の青年だった。周りにも入植者が入り始めると幌向川に渡舟場ができて、通学や買い物、汽車に乗るためなどに利用されるようになった。労働力のための若者も多く、渡舟場は出会いの接点となり若い人の間では『恋の渡し場』と称され、当時の渡し守の話では「花嫁さんを何度も乗せた」とのことである。

国の開発計画が急ピッチで進められるようになると、懸案であった捷水路

や新水路が次々と完成し、石狩川は次第に直線化していった。

時代の流れとともに幌向太も姿を変え、幌向波止場といわれた船着き場や渡場もなくなった。ただ、旧石狩川と旧幌向川は農業用水供給源として百年の歴史をもって農家の暮らしを支え、春や秋には野鳥の休息池となり、夏には釣り人の心をなぐさめ、岸辺には大樹が茂り、今なお開拓当時の面影をとどめている。

《補説》

・捷水路と三日月湖

捷水路とは蛇行する河川の屈曲部を直線化する（ショートカット）ために開削した人工水路のことで、洪水防止や土地の有効利用を目的として、石狩川をはじめ多くの河川で工事が実施された。

捷水路の完成によって切り離された川の一部は、ほとんどが埋立てられて耕作地に変わったが、わずかに古川や三日月湖として残され、現在も満々と水を湛え人々の心を潤している。

・停車場と簡易停車場（休泊所）

明治十五年（一八八二年）に官営幌内鉄道（手宮～幌内間）が開通したが、駅（停車場）の設置は札幌以北では、江別、幌内太（後の三笠）、幌内の三カ所だった。また、乗車する人や積む荷物がある時にだけ旗を立てて列車を停車させる駅（簡易停車場）が白石、幌向太（後の幌向）、岩見沢の三カ所に開設された。

幌向駅はその翌年の明治十六年（一八八三年）に停車場となり、さらに十年

後の明治二十五年(一八九二年)に駅舎を幌向太から現在地に移設して現在に至っている。ちなみに岩見沢駅は明治十七年(一八八四年)に停車場となり、幌向駅の移設と同じ明治二十五年(一八九二年)に、元町にあった駅を廃止して現在地に駅舎を新設した。

タコ部屋労働の話

北海道は明治維新とともに開発が始まり、農業開拓者として各府県から移住者が本道の各地へ入植した。また、開拓のために屯田兵が置かれ、主要な道路や鉄道建設、河川の整備などに当たったが、すべてを人力によっての作業のため、また、入植を開始して間もない北海道では、まだ人口過疎地であり慢性的な労働力不足で、開拓は遅々として進まなかった。この労働力不足を少しでも緩和するために、各地の集治監の受刑者(囚人)を強制労働させることになった。

北村近辺では、月形町の樺戸集治監と三笠市の市来知集治監の囚人によって、月形町と美唄市峰延町を結ぶ、道道二七五号線『峰樺道路』が建設されたことは、よく知られていることである。

囚人たちは、作業中もすべて赤い衣服を着せられていたので、地域住民は囚人たちを赤んぼと呼んでいたそうである。

刑務官の厳しい監視の下で、毎日過酷な労働を強制され、このため命を落とした囚人たちも多かったと伝えられている。

北海道の開発が進むにつれ、道路や鉄道の拡張、河川や港の改修、排水溝の掘削、炭鉱の開発など、労働力の不足はますます深刻になってきた。このころ北海道の開拓はさらに進捗し、国による直接の施工だけではなく、民間業者への委託も増え、民間業者は道外も含めて労働者を確保し始めた。工事の計画が出来て、これを請け負った業者は、まず人夫集めを始める。当然本道にいるはずがないので、他府県に手をのばすことになるのだが、そこはうまくできていて、各府県の都市にはこうした人夫を集めることを商売にしている業者がいて、格好な若者を見つけると、甘い言葉で近づき、まずお金を貸す。それが何回も重なり、二十円、三十円と借金が増えると当然返却に窮することになる。そこがこれら業者の狙いである。北海道に行けば『金のなる木』があるような話をして、これらの者を本道に送ってくる。着いた所が『タコ部屋』という工事の現場である。そうしてその日から『タコ』の生活が始まる。

美唄から北村中小屋の泥炭地を横断する第二幹線排水掘削工事が始まったのは、昭和三年の早春である。岩見沢在住の請負師が徳橋の土地に仮小屋を建ててタコ部屋を開いた。ここに各府県から送り込まれてきた二〇〇名を超える若者が、タコとして働かされることに

なった。タコの生活は酷いものである。夜寝る時の枕は一本の木である。朝四時にこの木の枕の端が叩かれ一斉に起こされ、顔を洗う間もなく朝食、食事が終わるのを待って工事現場に駆け足、逃亡防止のため、みんな裸に青と赤の腰巻一枚である。四人一組になってのノルマ作業である。二人で掘った土を二人で『モッコ』に入れて運ぶのであるが、もともとノルマそのものが厳しいものだったので、食事の時間を除いては休む暇もなく、夜六時ころまでこの作業が続く。この間、ノルマを終った者だけが部屋に帰ることを許されたが、ほとんどが都会育ちのひ弱な若者たちだけに、ノルマが終わらず八時、九時までも働かされる。休日も祝祭日も、雨の日も雪の日も休むことはない。

しかし、食事は体が元手であるだけに、腹いっぱい食べさせ栄養の面にも気を配っていた。そのため三か月もすると厳しい労働のなかでも若者たちは逞しい体になっていった。

労働賃金は一日一円五十銭位で、このうちから一円余りが食費として差し引かれ、残りのうちから前借金の返却に当てられたので、自由になるお金はほとんどなかった。工事はその年の十二月半ばで終わったが、タコの中には前借金が残っているので、また次のタコ部屋に売られていった者、前借金は返したが帰郷の旅費がないため、市街地に入ってスラム生活をする者などで、どうにか故郷に辿り着いたのは、ほんの一握りの人たちに過ぎなかったという。村の駐在所の巡査が、月に一、二度部屋の状態を見に来たが、酒肴のもてなしを受けて帰っていくという形式だけに終わっていた。これはこの部屋だけではなく、どこのタコ部屋でも同じようなものだったという。

第二次世界大戦が始まり石炭の需要が高まると、どこの炭鉱でも必ずといっていいほど、このような タコ部屋があって、過酷な労働を強いられていた。タコ部屋労働は、終戦の昭和二十年頃まで様々な作業現場で当たり前のように行われていた。皮肉にも、もしもこの当時もう少し人権が守られるような世の中であったら、本道の開発はもっともっと遅れていたことだろう。ともあれ、現在の第二幹線排水掘削の陰には、こうした悲劇が秘められていたのである。

タコの語源についての定説は定かではないが、海に棲んでいる蛸は獲物がない時は、自らの足を食べて飢えをしのぐという。この蛸と同じように、自らの身体を売って生きなければならない、劣悪な環境に置かれた人たちをタコと呼び、その居住する共同の住居をタコ部屋と呼ばれていたというのが通説のようである。

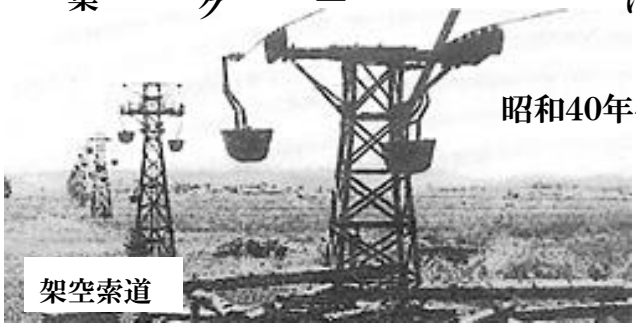
客土（土地改良事業）

北村地区は低地にあるため、開拓以来、数多くの水害に見舞われてきましたが、人々は水を抜く排水事業に取り組んできました。開拓後しばらくは畑作が中心でしたが、「なんとか自分たちで米を作って食べたいものだ」との願いはあったものの、北村地区のほとんどが泥炭地であったために実現できませんでした。しかし、昭和の時代に入ってから、美唄達布で初めて水田作りが行われるようになりましたが、泥炭地とあっては収量も少なく栄養分のある土を水田に入れる客土事業の必要性は早くからいわれていたそうです。初めは北村地区内にある養分の多い真土を掘って馬車や馬橇に積み込んで水田に運び入れる馬搬という方式がとられましたが、土を掘った跡に水がたまり沼になった所が多く残っており、今はヘラブナ釣りの名所として知られ、多くの釣り人でにぎわっています。太平洋戦争が終わった昭和二十年

（一九四五年）以後、国は食糧増産に力を入れるようになり、水田を新しく作るほか、これまでの小型の水田を大型化し、機械の力を生かした大型農業を進めることになり、北村地区でも土地改良事業の一つとして、客土事業が各地で取り組まれました。美唄市や岩見沢市、旧北村にまたがる土地改良事業が進められましたが、美唄市峰延の山土をスキー場のリフトのように、『架空索道』と呼ばれるように鉄塔から鉄塔に張りわたされたワイヤーに、バケットと呼ばれる入れ物にいれて空中を運びました。

北村地区の中小屋に下ろされた土は、トロッコに積み込まれ、機関車に引かれて北村地内に運ばれました。これを『軌道客土』と呼んでいます。客土事業も初めは人や馬によって、やがてトロッコ、そして今日ではトラックによって土が運ばれていますが、「運搬方法の変わり方に時の流れを感じる」との古老の言葉も聞かれます。

昭和40年代まで稼動



架空索道

軌道客土

きつねの恩返し

石狩川のほとりに開拓の鍬が入ってからしばらく経ちました。

入植当時は、一帯に茂っていた大木は次々と切り倒され、あちこちに掘っ建て小屋が目立ちはじめました。小屋の周りを覆っていた葦や茅、熊笹なども刈り取られ、少しずつ開墾して次第に畑地へと姿を変えていき、ずいぶんと村らしくなってきました。

村のあちこちには石狩川から切り離されてできた大小様々な三日月湖や沼がいくつもできていました。

ある村はずれの小高い丘を取り囲むようにして、大きな沼がありました。その沼のほとりにぽつんと小さな掘っ建て小屋が建っていて、おじいさんとおばあさんがひっそりと暮らしていました。丘のふもとや小屋の周りには、わずかばかりの畑が耕されていますが、ほとんどはうっそうとした森林や笹藪に覆われていて、小鳥やきつね、うさぎなどたくさんの動物が住んでいました。沼にはコイやフナ、ワカサギなどがたくさんいて、おじいさんは沼のほとりに船着場をつくり、小舟を浮かべて、時々舟を出しては、おばあさんと二人で食べるだけの魚を獲っていました。たまに村の人に頼まれて、沼の向こう岸まで渡してやることもありました。沼は細長く、周りが湿地になっているので、沼の周りのぬかるんだ道をたどって対岸まで行くには一時間以上もかかりますが、舟ではほんの五、六分です。おじいさんは頼まれるといやな顔もせず、快く舟を出してやりましたが、「わしは渡し守じゃあないけんのう」と言って、お金は一切受け取ろうとしませんでした。

昨日まで降り続いていた雨がやっと止んで、久しぶりに晴れ渡ったある春の日、おじいさんは丘の上の林に山菜採りに出かけました。林の入口に入って間もなく、近くでカサカサ、カサカサと物音が聞こえてきます。

「風も吹いてないのにおかしいなあ」

おじいさんは立ち止まって、じっと耳を澄ませていると、またカサカサ、カサカサと藪を掻き回すような音が聞こえてきます。

おじいさんは、音のする方へそっと近づいて行きました。すると、大きな木の根元にきつねが一匹横たわっています。どうやらイタチを捕らえるためのトラばさみという罠に後足を挟まれてしまったようです。

必死で外そうといくらもがいても罠は外れないので、痛みと疲れでぐったりしているようです。おじいさんは、「誰がこんな所に罠を仕掛

けたか知らんが、むごいことをするものよのう」と言って罠を外してやりました。幸い怪我は軽く傷口に血が滲んでいる程度で、骨折しているようでもないので、持っていた傷薬をぬってやり、腰に下げていた手拭いで傷口をしっかり縛ってやりました。

その間きつねは、おじいさんがするままにじっとしていました。

「もう大丈夫じゃ、子どもたちが腹をすかして待っているだろうに、早く帰ってやりなされ、もう捕まるでないぞ」

きつねは、五、六歩よろよろと歩いてから振り向き、立ち止まっておじいさんの方をじっと見つめています。おじいさんは背負い籠の中から、おばあさんがこしらえてくれた弁当の入った巾着袋を取り出し、

「ほれ、お土産じゃ」と、きつねの前に放り投げてやりました。きつねはしばらくじっとおじいさんを見つめていましたが、やがて袋をくわえて元気よく走って林の中に消えて行きました。夕方になっておじいさんは、山菜をどっさり背負い籠に入れて家に帰り、おばあさんと二人でウドやコゴミなどの処理をしながら今日の出来事を話しました。

「それは、ほんに良いことをしたのう」

おばあさんも嬉しそうに、おじいさんの話を聞いていました。

春は足早に過ぎ、開墾の日々を忙しく過ごしているうちに夏も過ぎ収穫の秋を迎えました。その頃から、日頃あまり体の丈夫でないおばあさんは、野良仕事の無理がたたったのか、数日前に風邪を引いてから、体調が思わしくなく、薬を飲んでもなかなか回復せず、とうとう寝床に着いたまま起き上がることができなくなりました。

朝からどんよりとした空模様、風も少し強くなってきて、今にも雨が降ってきそうなある日の夕方のことです。おばあさんの病気の事も気がかりなので、畑仕事を早めに切り上げて家に帰り、今朝沼の向こう岸に仕掛けておいた網を取り込もうと舟を出しました。

おじいさんが作業を終えて家に戻ろうと舟を漕ぎ始めたとき、岸辺の少し開けた所に、一人の若い女の人が立って手を振っているのに気づきました。

不思議に思って舟を近づけると、

「お願いします。お願いします」と叫んでいるようです。おじいさんは、吸い寄せられるように女の人の立っている方へ舟を漕いで行きました。

「お願いです。舟に乗せてください」

女の人は向こう岸を指さして、

「わたしはあの丘の向こうの村に住んでいる者でございます。家に帰る途中道に迷ってあちこち歩いているうちに、こんな所に来てしまいました。お願です。向こう岸まで乗せて行ってください」

「そうでしたか。はい、はい、たやすいことですよ。わたしもこれから向こう岸の家に帰るところですから。どうぞ遠慮なく乗ってください」と、おじいさんはやさしく手を引いて、舟の舳の方に連れて行って座らせてやりました。舟はゆっくりと湖面を滑るように進み、あっという間におじいさんの船着場に着きました。その間、女の人はじっとうつむいたまま一言もしゃべらず、何か考え事をしているように、時々おじいさんの方に目をやり、深いため息をついたりしていました。

「はい、着きましたよ。気を付けて降りなされ。そうそう、珍しくもないが、これは今獲れたばかりの魚じゃ。よかったら持っていきなされ」おじいさんは大きなコイを何匹か網からはずして、袋に詰めて恐縮する女の人の手に持たせてやりました。

「助かりました。何とお礼をいっていいか分かりません。本当にありがとうございました」舟から降りた女の人は、何度も何度も頭を下げてお礼をいって、おじいさんの小屋の横から丘に向かって延びている小道の方へ上って行きました。

女の人を見送ったあと、おじいさんは舟を係留したり漁の後始末をするため急いで舟に戻りました。すると、先ほどまで女の人の座っていた舳の所に小さな包みが置いてあるのに気づきました。

「ありゃ、たいへん、忘れものじゃ」おじいさんは包みを抱えて女の人がたった今上って行った小道に向かって走って追いかけました。

しかし、どこを見渡しても女の人の姿は見当たりません。丘の上に続く細い一本道だからとっくに追いつくはずなのに。

おじいさんは諦めておばあさんの待つ小屋へ急いで引き返して行きました。おばあさんは時々苦しそうに咳をしていましたが、それでもおじいさんの顔を見ると安心したのか元気そうです。

「そのうちに忘れたことに気付いて戻って来るだろう」と、二人は網の始末や獲ってきた魚の始末をしたり、夕食の支度をして女の人の来るのを今か今かと待っていましたが、夜更けになっても現れません。遅い夕食をすませ、明日の仕事の段取りをしながら、「この包みの中に何かとても大切なものが入っているのではないだろうか」と気になった二人は少し気がとがめましたが、包みを開けてみることにしました。紫色の上等な風呂敷を開くと、上に手拭いが一枚、その下に巾着袋がきちんと畳んで入っています。

拡げて見ると見覚えのあるおじいさんの手拭いです。

それはこの春に罠にかかったきつねを助けて手当てをしてやった時に、傷口を縛ってやったあの手拭いではありませんか。

巾着袋はお土産にあげた弁当を入れていたものです。巾着袋の

中には銀色の小さな紙包が入っていてその中には、おじいさんにはとても買うことのできないたいへん高価な薬が入っていました。二人は顔を見合わせて驚きと共に事の次第がだんだんと分かり涙を流して喜び合いました。

秋は足早に過ぎ去り、長い厳しい冬がやっと終わりを告げ、北国にも遅い春が廻って来ました。掘っ立て小屋の周りの小さな畑の雪もすっかり融けて、野良仕事が始まる季節を迎えました。今日は朝からすっきりと晴れ渡り、ヒバリがピーチク、ピーチクさえずっています。沼の畔ではコイが元気よく飛び跳ね、ミズバショウが水面を彩っています。掘っ立て小屋の近くの畑からは、力強い鍬の音とともに、おじいさんとおばあさんの明るい元気な笑い声が絶え間なく聞こえてきます。

入植して間もないころ、あちこちに点在していた三日月湖や沼は、農地整備のための埋め立てや客土などのため、多くは姿を消してしまいました。おじいさんとおばあさんが暮らしていた掘っ立て小屋があった小高い丘や沼がどの辺りであったのか、今では知るすべもありません。

埋もれたお地蔵さん

石狩川の畔から少し離れた所に、村へ通じる獣道のような一本道が通っていました。その道を少しそれた小さな空き地に、いつごろだれが建てたのか、小さな祠が忘れ去られたように建っていました。柱や壁の傷み具合から見て、かなり古い時代に建てられた建物のようで、その昔この地に入植した開拓者が、何らかの思いがあって建てたものと思われますが、知っている人はだれも居りませんでした。

祠の中には可愛い小さな石のお地蔵さんが祀られています。少し前までは、近くを通ったお年寄りが手を合わせて行ったり、祠の周りの笹を刈ったり、まれにお花を供えていく人もありましたが、次第に訪れる人がだれもいなくなりました。祠は村人から忘れ去られ、雑草に覆われるまま、いつしか朽ち果てて土に埋もれてしまいました。

ある年のこと、大規模な河川改修工事を行うため、祠が建っていた場所に沿って、新たに排水溝を造成することになりました。工事は春の雪解けを待って始まり、大変な難工事を重ねて、二年後の夏の初めに計画通りに終わりました。排水溝は完成しましたが、工事を行っていた期間中に、埋もれていた祠の遺構やお地蔵さんは、だれの眼にも

とまらず発見されることはありませんでした。残土や瓦礫などに交じってどこかに運ばれ、埋没してしまったのか、あるいは洪水の時に土砂と一緒に流されてしまったのかもしれません。

排水溝の完成が予定されていた年は、春先から近年には稀にない好天に恵まれ、村人たちは秋の収穫を楽しみにしていました。排水溝が完成して、村人たちが喜びに沸いている頃から降り出した雨が何日も降り止まず、とうとう夜半に排水溝が決壊して水があふれ出し水害が心配されました。しかし、突然雨は夜明け前になって止み、明け方には青空が広がり久しぶりに明るい太陽が顔を出しました。あちこちに溢れていた水は見る見る引きはじめました。かろうじて大洪水を免れた村人は胸をなで下ろしました。水がほとんど引いたので、被害を受けた個所の点検や補修を始めようと排水溝にやって来た村人たちは不思議な光景を目にしたのです。

完成したばかりの排水溝の一部が土砂にすっかり埋め尽くされ、土手のように盛り上って流れを堰き止め、洪水によって新たにできた別の水路に迂回するように水が流れているのです。

村人たちは力を合わせて、排水溝をもと通りに修復しましたが、その後も大雨や長雨などのたびに、ここだけが決壊して同じ事が繰り返し起こるのです。やっと修復作業が終わった村人たちは、「不思議な事があるものだ。ここだけがどうしてだろう。何か罰が当たったんだろうか。それとも何かの祟りかなあ」と、間もなく収穫の時期ですが、それに合わせるようにやって来る台風の豪雨による洪水が心配で不安な気持ちが増すばかりでした。

今日も村人たちは村の広場に大勢集まって話し合っています。

そこに一人のお坊さんが通りかかりました。心優しい村人は、「ご苦労様です。さぞお疲れでしょう」と、お茶を勧めたり色々と接待しました。お坊さんは全国各地を行脚する修行僧です。春に船で函館に着き、あちこち旅を続けながら小樽と札幌でそれぞれ数日を過ごしてから石狩に寄り、その後当別を経由して月形の樺戸集治監に寄って数日を過ごして、その後石狩川を渡って夕張へ向かう途中、たまたまこの地を通りかかりました。

「皆さん大勢お集まりで、何か相談ごとでも」と、お坊さんは優しく尋ねました。村人は、新しく造られた排水溝にまつわる今までの出来事を詳しく説明し、困り果てていることを話しました。

「その場所はどの辺りですか。そこにわたしを連れて行ってください」

「はい、すぐ近くでございます」

村人は、お坊さんを排水溝のそばに案内して、指さしながら口々にその時の状景を説明しました。お坊さんは村人の話を聞き終わると、排水溝の方に向かってしばらくじっと目を閉じて手を合わせてから、聞き取れないような小さな声でお経を唱え始めました。しばらくして、お経が終わったお坊さんは、「みなさん、この水路が造られる前に、この近くに地蔵堂か何か、祠のようなものはなかったかね」と尋ねました。村人は突然のお坊さんの言葉に首をかしげながら、それぞれ顔を見合わせました。しかし、だれも黙ったままで、知っている人はいないようです。そのうちに一人の老婆がお坊さんの前にゆっくりと進み出て言いました。

「思い出したわ、そういえばわしがまだうんと小さい頃、ばあちゃんに連れられて、よくこの辺のお宮さんにお詣りに来たことがあったよ」

村人はおばあさんの意外な話に驚きましたが、お坊さんは

「それは、どの辺りですか」

「そうじゃなあ、どこだったかなあ。たしかこの先に小道があって、あの辺から少しそれた辺りに小さなお堂があったと思うなあ。可愛いお地蔵さんが立っていたっけ、そうそう、あの辺りだと思うよ」

おばあさんは、新しく造られた排水溝の一角を指さしたではありませんか。洪水のたびに土砂で堰き止められ、盛り上がって土手のようになるその場所です。村人たちは、おばあさんの思いもよらない話に目を丸くして、腰を抜かさんばかりに驚きました。

「だけどなあ、あの頃もお堂はだいぶ荒れていたし、ばあちゃんが亡くなってからは一度も来たことがないで、あれからどうなったことか」

お坊さんは、おばあさんの指さした方に近寄って、しばらくじっと排水溝の方に目をやっていました。やがておもむろに手を合わせると、もう一度お経を唱え始めました。長いお経が終わるとお坊さんは、

「もう大丈夫じゃ、安心しなされ」と言い残し、あとは何も言わずあっけにとられている村人を後にして、岩見沢の街の方に向かって去って行きました。それから数日たって、とうとう台風がやってきて大雨の日が何日も続きました。村人たちは交替で寝ずの見張をしたりして災害に備えていました。しかし、いつもは決壊することを覚悟していた排水溝はびくともしません。雨が止んで水かさが少なくなると、何もなかったように穏やかに流れていました。その後、不思議なことにどんなに大雨が降って水かさが増しても、排水溝が土砂や瓦礫に埋もれたり決壊することはなくなりました。

村人たちはたいへん喜び、あのお坊さんへの感謝の気持ちと埋もれた

お地蔵さんへの供養を兼ねて、近くの森の中に新しく祠を建ててお地蔵さんをお祀りしました。

「あの祠は、いつ、どんな人が建てたのだろう」

「どんな思いでお地蔵さんを祀ったんだろう」

「あのお地蔵さんは、今どこに眠っているんだろう」しばらくは、村人が集まって祠の掃除をするときやお祭りの日などには、埋れた祠とお地蔵さんの話題になりました。そんな時には決まって、「あのお坊さんは、なぜ一言も訳を言わないで行ってしまったのだろう」と、村人の話題になり、様々な憶測が飛び交いましたが、時が経つうちに次第に忘れられ、村人たちの脳裏から消え去っていきました。その後、この地域一帯は大規模な農業基盤整備や河川改修、用排水路の整備事業などが進められ、現在は美しい田園風景へと姿を変えました。

今では、その時の排水溝やお地蔵さんを祀った祠のある森はどの辺りだったか、祠やお地蔵さんはどうなったのか全く分らなくなってしまい、わずかに古老たちの話として残っているだけとなりました。

天然ガスの話

北村地区は泥炭地であったため、開拓に苦労をし、真土を運び込む土地改良に取り組んで、今日の美田を造り上げた先人たちの苦労は、大きかったと思われます。泥炭地であることは、天然ガス（メタンガス）が湧出する事例も見られ、つい最近まで炊事用にメタンガスを利用していた農家が数軒ありました。

昭和五十八年（一九八三年）農村環境改善センターの床暖房に利用するために、ある程度の水温のある地下水を求めてボーリングをしていたところ、温泉が噴き出し大騒ぎとなりましたが、自噴する温泉水の中には、水溶性ガスが含まれており、ガスの一日の産出量は八百トンといわれています。また、栄町地区でガスの試掘試験を実施したところ、ガスが噴出、その時、少量の原油も確認され、北村地区の地下には

北村赤川鉱山

ガス層や石油層があることが分かりました。栗沢地区に『石油の沢』と呼ばれる、原油がにじみ出ている所がありますが、岩見沢市の地下には将来有望な地下資源が眠っており、将来いつか取り出され、岩見沢市の活性化につながるかも知れません。

電気が来た

「さあ、もうすぐだよ」待ちわびていた電灯がいよいよ今夜灯されることになったのです。

配線を終えた作業員が、部屋の天井から下がっているソケットに電球を差し込んでから、子どもたちが固唾をのんで見守る前で、ゆっくりとスイッチをひねりました。

「ワーッ、電気だ、電気だー」

子どもたちは飛び上がって目を丸くして喜び、まぶしさに目を細めました。

大人たちもあまりの明るさに驚いて、互いに目の前の人の顔を指さして、

「こんなに明るかったら、顔のシワまではっきり見えるよ」と言って笑い合う女の人たち。

「家の中の汚れが見えすぎて、どうも落ち着かないねえ」と言って、にこにこ顔で雑巾を取りに行くおばあさん。部屋だけではなく、家族みんなの気持ちまで明るくなったようです。

まだ電気が来ていない町や村がたくさんあった時代ですから、噂を聞いた知り合いの人たちが、わざわざ訪ねて来ることもありました。

みんな一様にその明るさと不思議さに驚くばかりでした。

「見せてもらって、ありがとう」と言って、部屋を出る時に電球に向かって「フーッ」と息を吹きかけて、明かりを消そうとした人がいたという笑い話が残っているほどです。電灯が普及する前は、夜暗くなると、ろうそくの火や『小灯し』を明かりにしていましたが、次第にランプが多く使われるようになりました。ランプに火が灯ると煙が発生して、ホヤというガラスの筒の内側に煤がたまり真っ黒になります。次の日に使うまでには必ずピカピカに磨かなければなりま

せん。それは、たいてい子どもの仕事でしたので、子どもたちは、もう手が真っ黒に汚れることがなくなり、それにホヤ磨きが毎日の日課でしたので、たまに忘れてお目玉を食らうこともなくなって大喜びです。

まして、薄いガラス製のホヤは割れやすく、壊して叱られることもなくなったのでなおさらです。しかし、電気が各家庭まで届くにはたくさんの電信柱に張られた電線を通ってきます。台風や洪水、吹雪などで電線が切れるとたちまち停電します。いったん停電になると復旧に時間がかかり何日も停電が続きます。時には一週間以上も電気が来ません。その度に、物置にしまってあったランプを出してきて不便さをしのぎます。その時のランプの明かりの物足りなさに、電気のありがたさをしみじみ感じたということです。しかし、夜遅くまで仕事をする人は、急ぎの仕事の途中で停電になると、「また停電か。こんなことなら停電のないランプの方がよっぽどましだ」などと言ったとか。このような経験をした人たちも、だんだんと少なくなり、今ではもうすっかり忘れられた遠い昔の光景となりつつあります。我が国で最初に電灯が灯されたのは、明治十一年(一八七八年)三月二十五日で、この日を『電気記念日』と定めています。北海道には、明治二十四年(一八九一年)札幌に点灯したのが初めだといわれています。ちなみに岩見沢には、明治の終わりから大正時代にかけて、北村には昭和五年(一九三〇年)に、第一区と第二区(現在の豊正、豊里地区)に灯されたのが初めてです。

ランプのホヤ

我が国で最初に電灯が灯されてから五十年以上経ってからのことです。初めの頃の電球は透き通ったガラスの白熱球(裸電球)でしたが、眩しいので光を和らげるために、曇りガラスの電球も使われていました。今では電気の消費量が少なく、より明るく長持ちのする蛍光灯やLED電球が使われるなど、時代と共に電球もどんどん進化しています。

白熱球は平成二十四年(二〇一二年)から、その役割を終えつつあり、製造されないことになりました。時の流れと共に、古き良き時代の面影がまた一つ消えてしまった思いがします。小灯しとは、浅い小さな皿などに菜種油を入れて、そこに垂らした紐に、沁みてくる油に火をつけて明かりにしたものです。

夜暗くなって外に出る時は、ロウソクを灯した提灯や、手持ち用のランプを使いました。その頃の便所(トイレ)は、どの家でもほんどが外にあったので、闇夜には提灯や手持ち用のランプの出番が多かったということです。

境界線ものがたり

石狩平野のほぼ中央に位置する旧北村は、明治三十三年（一九〇〇年）七月、岩見沢村から分村、開拓功労者の北村雄治氏の名にちなんで村名を『北村』として歩みを始めました。

明治三十年十月、北海道庁の行政区画によって新たに定められた空知支庁に所属するところとなりました。地形的にみると極北地点は、豊正大曲の石狩川を挟んで向こう岸は月形町と接するところであり、極西地点は、北村砂浜の石狩川に接する突出したところとなっています。また、極東地点は、峰樺道路の二枚橋のあたりとなっており、更に極南地点は、かって幌向太といわれた旧石狩川と旧幌向川の合流点となっています。極東、極南地点を一直線に結んで二十四キロメートル、南北に最大九・一キロメートルとなる三・六定規形（直角三角形）に近い形状となっていますが、面積九十六・三平方キロメートルを持ち、分村当時の人口は、二四五三名を数えたと伝えられています。通常、市町村の境界線は、河川や山の稜線、その他自然の形状、また、主要道路などに沿って引かれますが、岩見沢村と北村の境界線を引くに際して、手掛かりとなるものがなかった事情もあって、図面上で一直線に二十四キロメートル引かれたと伝えられています。

分村後に入植した人たちにしてみれば、境界線が見えるはずもなく、地形に合わせて建てた家屋（母屋）や納屋、農地などが、岩見沢村と北村に分断される事例も出たそうです。北村に入植したつもりでいたら、一部分が岩見沢村に入っていたということでしょうが、税金を課する（課税）場合、どちらの村がするかで協議の必要が出てきたことでしょう。古老の話によると、母屋の建っている場所の村が課税した事例もあったとのことですが、『北村八〇年史』や『一〇〇年史』などには載っていません。しかし、昭和四十年代に実施された国土調査（地積調査）によって住宅地に課税することが明確になり、古老が言われる母屋のあるところに課税したとの慣習法もあながち間違っていなかったということになるのでしょう。

機械的に図面上に引かれた一本の線が、その後、課税の仕方で苦労する、笑えぬ話を生んだとの話は今でも語り継がれています。

隕鉄夢物語

長年、北村中央公民館や農業資料館に展示されていた隕鉄と思われる鉄塊を目にした北村地区住民は多いと思われる。

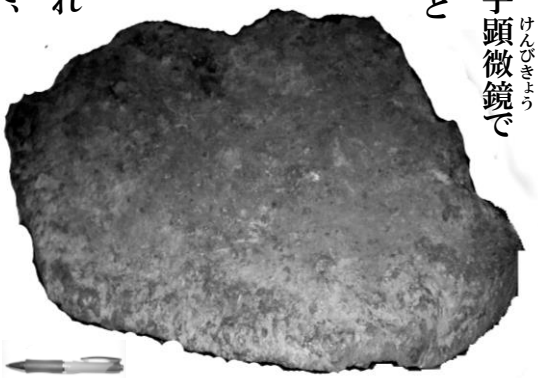
昭和三十年代初め、豊里地区での築堤工事の折、土中から二つの鉄塊が発見されたのが事の始まりで、これを聴いた埋蔵文化財に詳しい林登実彦北村中学校校長（故人）が、日本酒持参で現場に駆けつけ大きい方の鉄塊を入手したと伝えられている。

林校長は鉄塊の一部を切り取り、北海道大学に持ち込み鑑定を依頼したものの、「隕鉄である」という明解な結論は出ず、そのため北村地区では、「隕鉄ではないか」との期待感のもとに時が流れた。

平成十八年三月、市町村合併に伴って隕鉄問題は岩見沢市教育委員会に引き継がれたが、同教育委員会は平成二十五年四月、独立行政法人国立科学博物館にサンプルを送り、成分鑑定を依頼した。

同館はX線分析装置付き走査型電子顕微鏡で分析したところ、鉄の他は炭素、珪素と微量のリンのみで、鉄隕石に特徴的で少なくても五パーセント程度含まれるニッケルが含有していないことから「鉄隕石ではない」との結論を出した。

そして、「表面は樹皮様のもので被われているが、その下はほぼ金属と思われる一部に岩石質の部分も見られるので、おそらく鉱滓（スラグ）と思われる」とのコメントがついている。



ボールペン（134mm）

これで鉄隕石ではないという鑑定結果は「鉄隕石では？」という人々の期待感を打ち砕くところとなったが、コメントにある「鉱滓では？」との推察は、発見された場所で過去に製鉄事業が行われた事実はなく、また、現物が石狩川の上流部から流れて来るような代物でないことから、新たな謎を生むことになるだろう。鉄塊発見の経過を知る製鉄所勤務経験のある赤川地区の堤哲雄氏は、「切り口を見たが純度の高い鉄は自然界には存在せず、宇宙からの飛来物ではないかと思った」とのコメントを発している。

更に、「鉄隕石では」と長年にわたり関心を持ち続けた豊正地区の武田貞光氏（故人）は、「昭和十八年か十九年頃、議員をしていた父親が夜、議会からの帰り、光る物体が豊正から豊里方面に飛び去るのを目撃した。鉄隕石ではないかと思った」という話を聴いたと話している。残念ながらこの話が豊里から出土の鉄塊と結びつく証拠はないものの、「鉄隕石であって欲しい」との人々の期待感に結びつくものであろう。鉄隕石ではないものの、鉱滓と結論づけるのには無理があるとすれば、いつの日か再び「鉄隕石では」という声が出るかも知れない北村隕鉄夢物語である。

故郷に錦を飾る

明治二十年代から北村の入植、開拓は本格化しましたが、入植者の多くは北海道に新天地を求め、故郷を後にしたと伝えられています。新天地を切り開き、そこに生きるとの気構えと希望が度重なる冷害や水害などの自然災害はもとより、開拓の手をさえぎる原生林との厳しい闘いを支えたことでしょう。

大木を切り倒し、根を引き抜く作業（抜根）には苦労したものだとの声は数多く残っています。抜根作業に馬が活躍したことは当然ですが、「馬には助けられたもんだ」との言葉もよく聞かれるところですが、人馬一体となっての作業ぶりは村内各所で見られたことでしょう。「いつかは開拓に成功して、故郷の人々にその様子を見せたいものだ」との思いで開拓の苦労に耐えたのでしょう。

しかし中には、「俺一代で開拓に成功し、故郷に錦を飾る」と豪語した者もいたと語る古老の言葉が残っています。

開拓が一代で成功するほど生易しいものではないことは、多くの人たちが経験するところですが、初代の苦労を二代目が引き継ぎ、三代目に伝えていく営みが続けられてきたことはもちろんのこと、畑作から水田へ移り変わっていく中で、それぞれの家が足場を固めていったことは言うまでもないことでしょう。

「一代で引き上げると言った者は、本格的な家を建てないので、すぐ分かる」と話された古老もいますが、食べるのが精一杯で本格的な家づくりは、したくても出来なかったというのが実情でしょう。

三代目、四代目となった今日、『故郷に錦を飾る』との言葉は絶えて聞かれなくなりました。

大水害と葬儀

昭和七年（一九三二年）八月の大水害は、滞水一か月にも及び、北村は壊滅的な状態に陥ったものの、全国から暖かい支援の手が差し伸べられ、村人もそれを支えとして村復興のために一丸となって努力したと伝えられています。

ある古老が次のような話を残しています。

家の周囲が水びたしの折、奥さんが急病で亡くなり、交通途絶の状態では葬式を出すことも出来ませんでした。遺体はそのまま家に置き、水が引くのを待ちましたが、一週間ほどしてやっと水が引いたので流木や手近かの木を集めてやっと荼毘に付すことができたが、「妻には可哀相なことをしたものだと思う」との言葉が残っています。

今日ではドライアイスである程度持たせることは可能ですが、昭和八年当時、それも夏とあっては遺体の腐敗を防ぐ手立てはなく、家族の人たちが苦労したことは充分想像されますが、滞水が一か月にも及んだ割には、不思議なことに水害期間中、死者が出て葬儀に苦労したという話は外に聞かれません。

その後、古老は男手ひとつで子どもたちを育て上げたと話されましたが、「生涯の折々で、妻に悪いことをしたとの思いがしたものだ」とどこか寂しげな様子で話しましたが、昭和の大水害の記録に秘められたエピソードです。

龍ヶ池の雷魚

岩見沢と美唄との境界を通る、地元では峰樺道路と呼ばれる道が作られたころの話です。

現在の二枚橋付近はどこを見渡しても一面野原ばかりで、そこに道を作るための調査や測量が始まりました。

ある晴れた夏の暑い日急に西の方から低い黒雲が転がるように近づいてきました。十人ほどの一行は「夕立が来るぞ！」と言い、物がぬれないように警戒しました。特に器具類は貴重で、水にぬらすことは厳禁でしたから大あわてです。

すぐ近くまで迫ってきた黒い雲から何かが地上に降りたように見えた瞬間、雷鳴が響き、稲妻が走り、急に強い東風がふいて黒雲は天に昇って行きました。間もなく晴天に戻りましたが、目の前で起こった天変にみんな驚きました。何かが降りたと思われる所に行ってみると、一町（一ヘクタール）ほどの広さの池が

ありました。みんなは「きっと龍が水を飲みに来たのではないか」と言い、そこを『龍ヶ池』と呼ぶようになりました。何年かして道は完成しました。作業に当たったのは月形の樺戸集治監と三笠の空知集治監に収容されていた囚人たちでした。この道路はもともと二つの集治監を繋ぐ連絡路で、道のわきに電信柱が並んで立っていました。

ある夏の終り、樺戸集治監から三人の囚人が脱走しました。

それぞれ別々に分かれて逃げたのですが、そのうちの一人の囚人は、電信柱を目印に原野を南へと逃げて行きました。

二枚橋の近くまで来ると追手の声がしたのであわてて奥に入ると池がありました。龍ヶ池でした。のどが渇いていた男が水を飲んで顔を上げると、池の中から龍が大きな口を開けて向かって来るではありませんか。男は「私は何も悪いことはしておりません。どうぞ命だけはお助けください」と手を合わせました。

実はこの男、無実の罪で監獄に入れられていたのです。関西の出身で若いころから怠け者でグウタラ。他人の尻馬に乗ってはチンタラ暮らしていたあげく、自由民権運動の手先という汚名をきせられ政治犯として送られてきたのです。今回も他の脱走者の口車に乗り脱獄してしまったものの、自分ひとりでは何もできない身体も気も小さい男で、龍に向かって何度も「命ばかりは、命ばかりは」と繰り返し手を合わせるばかりでした。するとあたりが急に暗くなり、竜巻のような雲が池に降り、雷鳴がとどろき稲妻が光りました。

男の悲鳴を聞いた追手が声のした方へ行ってみると、池のそばに半分焦げた男の囚人服がありました。いくら探しても男は見つかりませんでした。

一方、稲妻に打たれた男は池の中で自分の身体の変化に気づきました。

魚になっていたのです。自分はナマクラばかりしていたのでナマズにされたと思いました。でもそうではありませんでした。男は雷に打たれて雷魚にされたのでした。

雷魚は寿命が長く何百年も生き延びるといわれていました。

命は助かりましたが龍ヶ池には出口がなく、男は一生そこに閉じ込められることになりました。

今も二枚橋近くの田畑の中に池があり、その時の雷魚が棲んでいると言われています。

《参考》

・二枚橋は、峰樺道路沿いにある峰延農協中小屋支所付近の国道十二号線寄りにありました。

狐森の元造

昔、石狩川に定期船が通っていたころ、石狩川の河口から船に乗り溯って行くと江別の港に到着します。そこを出航してから幌向太を経て、もう少しで終着港の月形に到着というころ、右岸によくキツネを見かける森がありました。手つかずの自然が多く残っている所で、まだ地名が付けられた所の少ない時代でしたので、船人たちは『狐森』と呼んでいました。

そこは石狩川と美唄川(現・旧美唄川)が並行して流れ合流する場所でもあり、小さな支流や沼なども点在していて水辺が多く、キツネのほかにもたくさんの鳥やけものが棲んでいました。

そのような未開の森もやがて開拓者が入り、森は切り開かれていきました。本州からの移住者も多くやって来て新しい村が誕生しました。

そのような時代のある年のこと、雪解けも終わりかけて岸辺の所どころに残雪が見える石狩川を、外輪汽船に乗ってきた若者が狐森に降り立ちました。名前を元造といい秋田から鰊漁場へ働きに来ていた若者でした。元造は銭函の鰊漁場で、ここ狐森から働きに来ていた若者と知り合って互いに気が合い、それに狐森という地名にも興味を持ったので誘われるままにやってきたのです。

元造は酒が強く陽気で狐森の友人宅に数日泊り、お互いの出身地の思い出話や狐森での生活の話で盛り上がり、「ここに開拓に入ると広い土地がもらえる」という話にはとても興味を示しました。さらに狐森で暮らすならば友人の妹を嫁にもらってほしいと家族が願っていることにとても乗り気でした。元造も家が農家で三男という身軽な立場だったので、盆と正月が一緒に来たような話でした。

元造が心を決めたのは、友人の妹がとても美人でやさしく、郷里の秋田美人に負けない美しさで一目ぼれしたからでした。元造は一度郷里に帰り、狐森で新しい生活をすることを家族に了承を得て狐森に戻り、色々と手続きや準備にかかりました。間もなく美唄川の南岸の少し上流に土地が決まり、小屋を建てて美人の嫁さんと住み始めたのは夏も終わりの頃でした。

二人は秋遅く雪が降り積もるころまで木を伐り、馬で根を起こし原始の森の開拓に挑みました。

元造は秋田の山深い小さな村の出身で、小さいころからまたぎという猟銃の

名人と呼ばれた祖父に動物の性質を教えられて育ったので、雪が降ると鉄砲を背負い、わなを仕掛けて動物を獲り毛皮を売って暮らしの足しにしました。

春には鰊漁場へ友人と一緒に出稼ぎに行き、五～六年で割り当ての土地を畑に変えました。周りの人たちは「働き者の元さん」とか「鉄砲射ちの元さん」と呼び、陽気な人柄はみんなに慕われていました。

水害や冷害、戦争もあり、年号は明治から大正そして昭和と変わり、元造も五十半ばを過ぎました。三人の娘たちはそれぞれ嫁に行き、美人の奥さんにも先立たれ一人暮らしをしていました。近くに嫁いだ長女が時々様子を見に来てくれています。畑仕事にも力が入らず他人に任せることが多くなり、唯一冬場の猟だけが楽しみです。

ある年の冬の日、いつものように鉄砲を背負ってわなの見回りに石狩川の方へ行くと、キツネの左前足だけがわなにかかっていました。

元造は一瞬、獲物を他の動物に持っていかれたと思いましたが、他の動物の足跡はなく、キツネの三本の足跡と血の跡が石狩川の向こうに続いていました。冬になると川が凍ってどこでも渡れるので足跡をたどって行くと、川向うの森の中に他の動物の足跡に交じって血の跡も消え行き先が分からなくなりました。長い間猟をしてきたがこんなことは初めてでした。元造は「よほど度胸のある頭の良い奴にちがいない」と思いました。その年以来、狐森地区のわなの仕掛けが全て外され獲物は捕れなくなりました。そこにはいつも三本足のキツネの足跡が残されていました。他の地区まで行かなければ猟ができなくなってしまいました。元造はそのキツネを『三本足』と呼び、執拗に追いました。しかし、キツネの方が一枚上手でいつも遠くから元造を見張っていて、足跡も上手に紛らわせていつも巻かれていました。夏になっても三本足はいつも物陰から元造を見ていました。その日はまだ夏の初めですがとても暑い日で、元造は川に沿った畑で長い柄の鍬を持って草取りをしていました。その時川の方で水の音がするのでふと見ると川岸でキツネがおぼれているように見えたので、元造は三本足を思い出し、こらしめてやろうと思って鍬を持って川岸へ下りて行きました。

川岸は水にえぐられ草だけで、元造は足を滑らせてアッというまに川の中へ落ちてしまいました。おぼれたふりをしていたキツネは、川下へ泳いで向こう岸へ渡ろうとしていました。元造はやっとの思いで岸に上がった時にはキツネの姿はありませんでした。

それから数年過ぎた秋、長女に変わって孫娘のお雪が元造の身の回りを見に来るようになりました。元造の家の近くに川幅が広くなった所があり、段々をつけて下り野菜などの洗い物をしておりました。

そこには春と秋に時々白鳥が渡って来て羽根を休めていることがありました。その日はどんよりと曇った日で、秋の長雨で水かさが増してあまり下へ行かなくても洗い物ができました。

夕方になってお雪が野菜を洗いに川へ行くと、その日も白鳥が十数羽川にいたり、向こう岸に上って羽根を休めていて良く見ると風下からキツネが若い白鳥をねらっていました。

お雪はとっさにイモをつかみキツネに向かって投げつけました。当たるとは思いませんでしたが、キツネは「キーン！」と一声鳴いて高く跳び上がり一回転してトンボを切ると、白鳥はいっせいに飛び立って行きました。するとキツネのいたあたりが突然雲に穴が開いたように太陽が顔を出し、一瞬水面が陸続きに見えてお雪はキツネに向かって走り出しました。そして、すぐに増水した川にのまれてお雪の姿は見えなくなりました。それはアッという間の出来事でした。

一羽の白鳥が上空を回って去って行きました。暗くなりかけても帰って来ないお雪を心配して元造が川へ行ってみると、野菜の入ったかごだけがあり、お雪の姿が見えないのできっと川へ流されたのだと思い、近所の家に助けを呼びました。

それから大騒ぎになり地元のみんなで川を捜しました。お雪は春になったらお嫁に行くはずだった川下の若者の家の近くで冷たくなって見つかりました。元造はひどく落ち込んでおりました。

数日経ってから元造の夢枕に三本足が現れて、「お前にはずいぶんわしの身内がやられた。お前も身内をなくした悲しみが分かるだろう。おたがい年だし平和に暮らそうや」と言って消えました。元造はその年の冬から猟をやめて毎日家に閉じこもっているので周りの人たちは心配して、隣のおくさんは毎朝見に来るようになりました。

春になり雪も消えるころ、川にいつもにはないたくさんの白鳥が来て、とても賑やかに鳴いていました。その日はとてもよく晴れた暖かい日で、西空が真っ赤に染まり始めたころ、元造は「お雪は今頃お嫁に行って幸せに暮らしていただろうに」と思いながらストーブのそばでうとうとうたたねをしていると、玄関の戸をトントン、トントンと叩く音がしたので開けて見ると、母親に手を引かれたお雪が真っ白い白無垢を着て立っていました。

「今日お嫁に行くので、ここで立ち振舞をします」ということで奥の部屋を通してたくさんの人が入り、見たこともないご馳走がたくさんあり、歌ったり踊ったり笑い声でとても賑やかで、元造は、お雪が母親や自分の妻にも増してきれいなので、うっとりして見てい

て、うれしくてうれしくてたまりませんでした。やがて宴も終わり、お雪は手を引かれてみんなと一緒に帰って行き、元造は一人になって気がつくとすっかり暗くなっていました。

玄関の戸が少し開いていてストーブの火も消えそうで寒くなったので、戸棚から酒を出して一杯飲んで奥の部屋を閉めて寝につきました。

翌朝、隣の奥さんが様子を見に来て、「昨日はずいぶん賑やかだったね」と言うと、元造は、「昨日はお雪の嫁入りの祝いで、あんたも手伝ってくれてすまなかったなあ」というのです。となりの奥さんは白鳥の鳴き声のことを言ったのに、事情を知らない奥さんは、「元さんもいよいよぼけた」と思いました。なぜか元造の家の奥の部屋には白鳥の羽根と枯葉がたくさん落ちていました。

そんなことがあってから元造の家の周りで三本足を見かけるようになりました。いつしか元造は闘いの相手であったのに勇者のように思えて、老いて餌の取れなくなった三本足のために食べ物を置いてやるようになりました。夏になるとこの辺りはよく洪水があって水害の多い所でした。二、三日雨が降り続き、特に川上で大雨だったので水害になるかもしれないと地区の人たちが心配していました。

暗くなって一軒一軒回って「水が来るから早く逃げろや！」と声をかけて回った老人がいました。後日、他の地区で何人か流されたという話でしたが、狐森地区では早めに逃げたので全員無事でした。

水が引いて落ち着いたころ、「あの時、家を廻ってくれた老人はだれだったのだろう」という話になりました。その老人を何人かの人が見ていて、「ほおかぶりをして小柄で左手が不自由な人だった」ということでしたが、暗くてだれも顔を見ていないので、「この辺りに当てはまる人はいない」ということで地区の人たちに疑問が残ったままでした。

何年かして三本足の死骸を見つけて元造は、川のへりに小さな祠を建ててやりましたが、やがて元造も亡くなり、川は洪水対策の築堤工事により元造の家も祠もなくなり、狐森と呼ばれた地区は呼び名も区画も変わり、自然を切り開いた苦労の跡も時の流れにのみ込まれてしまいました。

炭焼きのじいさんとシロ

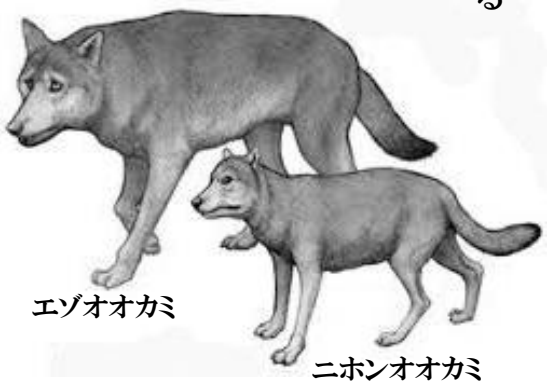
昔は日本にもオオカミが生息していて、ニホンオオカミというオオカミの中では小型な種類だったと言われています。

北海道にはニホンオオカミより一回りも二回りも大きく、オオカミの中でも最大級のエゾオオカミが生息していました。どちらのオオカミも、山林の開発による生息地の減少が大きな原因ですが、ニワトリやヤギなどの家畜や、時には人が襲われることもあったので目の

敵のように駆除され、十九世紀の終わりころを境に激減し絶滅したといわれています。北海道では、明治十二年(一八七九年)に異常な大雪にみまわれ、エゾオオカミの獲物であるエゾシカが大量死したことがありました。

そのことがエゾオオカミの絶滅を早める原因となったとも言われています。

北海道は、むかし『エゾ』とか『蝦夷が島』と呼ばれて、移住して暮らすには、とても困難な土地であるといわれていました。しかし、明治になって、北海道と地名が変わり、国の方針で開拓者が大勢入植して、原野を開墾して農地を拡げ、あちこちに町や村ができました。そして、色々な仕事をする人たちも渡って来て、人口も増えて、北海道の隅々まで開発の手が広がって行きました。



そのような時代のお話です。

ある山間の村はずれに、ポツンと一軒の掘っ立て小屋が建っていて、おじいさんが一人でひっそりと暮らしていました。家の近くでクマやキツネ、タヌキ、シカなどに出会うことは珍しいことではなく、オオカミに驚かされることもありました。おじいさんは僅かばかりの畑を耕して、いもや野菜のほかヒエなどを植え、農作業のかたわら、裏山の木を伐り出して炭を焼き、暮らしの足しにしていました。

ある日のこと、おじいさんが炭焼き小屋の中で仕事をしていると、遠くの方から「ズドーン」という銃声が聞こえてきました。

「また、オオカミ狩りが始まったな」と珍しいことでもないので、特に気にもしないで炭焼きの仕事を続けていると、小屋の入口の近くで何か物音がします。

おじいさんは、入口に垂れ下がっている筵を手繰って外の様子を窺って見ると、一匹のオオカミが入口の前に血まみれになって横たわっています。そばに子どもが一匹ちょこんと座っていました。おじいさんは、その様子からすぐに事情を察して、オオカミを抱きかかえて小屋の中に入れ、炭俵の積んである奥の方に隠しました。子どもはお母さんのそばにうずくまってじっとしています。

炭焼き小屋

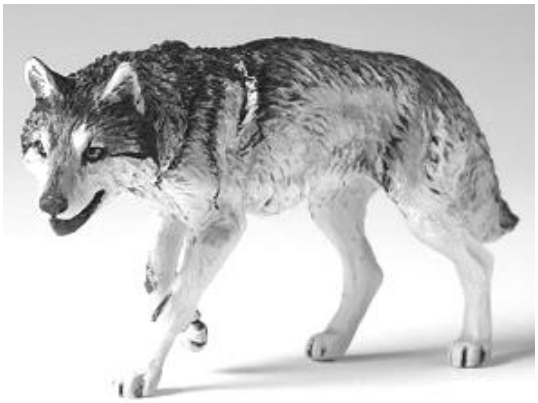
やがて二人の猟師がやって来ました。

「じいさん、こっちの方にオオカミが来なかったかい」

「いいや、来なかったよ。わしはずっと前からここで仕事をしていたが、そんな気配はなかったよ」

「そうかい、じゃましたなあ。そんじゃあ、あっちの方を探してみるか。弾が命中したはずだ、そんなに遠くには行っていまい」と言いながら猟師たちはもと来た方に戻って行きました。おじいさんは、猟師たちが見えなくなるのを見計らって、急いでオオカミの容体を確かめましたが、傷はかなり深いようで出血がはげしくぐったりしています。

おじいさんは、小屋の隅に枯草を集めて寝床を作り、付きっきりで手当てをしました。容体は一進一退で三日目の朝にとうとう亡くなってしまいました。そばには子どもが何も分からず、きょとんとしていました。おじいさんは、オオカミの亡き骸を、炭焼き小屋のそばに、印ばかりのお墓を作って葬ってやりました。



その日からオオカミの子どもは、シロという名前が付けられ、おじいさんと一緒に暮らすことになりました。シロはおじいさんにとてもなついて、四六時中いつも一緒で、幸せな日々が続きました。

月日が流れ、シロはもうすっかり大きく立派なオオカミに成長しました。

おじいさんは、いつかシロを山に帰してやらなければならないと考えていましたが、別れるのが辛くて一日延ばしになっていました。ある晴れた日の朝、おじいさんは「今日こそは」と心を決め、シロを山の奥深くに連れて行きました。

「ここなら鹿もウサギもたくさんいるだろうし、猟師もこんな奥まで来ないだろう。達者でなあ」といって放してやり、急いでもと来た方に戻って行きました。しばらくして立ち止まり、後ろを振り返ってみると、シロがすぐ後ろについて来ています。

「シロ、ついて来ちゃあだめだ、もうさよならだ」

そんなことを何回か繰り返しているうちに、シロも理解したのか、その場にじっと立って、「ウオーン」と一声悲しそうな声で鳴くと、山の奥の方へ走り去って行きました。

月日は流れ、元気だったおじいさんはもう体の自由がきかないほどすっかり齢をとってしまい、病気で寝込むことが多くなりました。

ある日、最近おじいさんの姿を見かけないので心配した村人が小屋を訪ねてみると、おじいさんは炭焼き小屋の中で息を引き取っていました。誰にも看取られることなくこの世を去ったのです。村人たちは丁寧にお弔いをして、炭焼き小屋の近くに墓を建ててあげました。

何とそこは、偶然にもシロのお母さんのお墓のすぐ隣です。

そんな事は全く知らない村人たちは、お彼岸や命日などに、お墓の掃除やお参りをして行きます。その後、村人たちの噂では、

「おじいさんの命日には、必ずオオカミが少し離れた所に座って、じっとお墓の方を見ていた」とか、

「オオカミがお墓の前にしゃがんでいたので、いなくなってから行って見ると、お花が供えてあった」また、ある村人は、

「炭焼き小屋の方からウオーン、ウオーンって、犬の遠吠えのような鳴き声が聞こえたので、近づいて見ると大きなオオカミがお墓の前にじっと座っていて、時々立ち上がって悲しそうな声で鳴き続けていた」

など、様々なことが語り伝えられていましたが、時の流れとともに、村人の記憶から次第に遠退き、いつしか忘れ去られてしまいました。

おじいさんが亡くなってから、そんなに長い年月が経たないうちに、この村からオオカミの姿は消え、鳴き声を聞くこともなくなりました。

そして、北海道のエゾオオカミは絶滅したのです。